
ふぁいなるクエスト！

高嶋ナカノ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ふあいなるクエスト！

【Nコード】

N3456Y

【作者名】

高嶋ナカノ

【あらすじ】

ある朝、ミナミンの枕元にいきなり現れた、女神アルテシア。彼女曰く、ミナミンこそが魔王ピイチャンを倒す勇者だというのである！！しかし勇者ミナミンはぐうたら無職、ニートでダメ人間、ヤル気とはまるつきし無縁の世界の男なのであった！！女神アルテシアは勇者ミナミンのケツを叩いて魔王ピイチャンを倒し、無事に世界の平和を取り戻せるのか的、ゆるゆる展開のダメダメギャグファンタジー！！（１ この話はほぼ全編、ほとんどが台詞文章です。ブログやチャットログ感覚で書かれていますので、横

書き読みを推奨します。顔文字などもありますので、苦手な方は回避をお願いいたします）（2 たまに挿絵があります。挿絵表示をONにしておいていただけると嬉しいです）

1話「夜明け前の勇者。」

> i 3 4 9 3 1 — 4 4 0 2 <

女神「起きなさい……勇者ミナミンよ……」

勇者「ンガ〜スピヨピヨピヨ……ムニヤムニヤ……もう食べられない……。」

女神「お約束チックな寝言を言っていないで、目を覚めますので……。」

勇者「こらあ。逃げちゃダメだぞう。ヨーコモ、ユキコモ、マリリンもみんな俺のものだあ。満腹だけどやっぱりみんな食べちゃおう〜ゲエツヘツヘツ……。」

女神「Σ（「口」lll） 食べるって女の方ツ？しかもお腹いっぱいとかいってるし！！連載開始早々ど淫夢ツ？ええい、起きなさいというにー！！！！！」

女神アルテシアは勇者ミナミンが寝ているベッドをひっくり返した！ドギヤバキめしょドンガラガッシャーン！！！！

（ノー……）ノ。。。

勇者ミナミンは床に頭をぶつけて、10のダメージを受けた！

勇者「、（#。D）ノ ゴルア！！誰じゃい、俺様のことを派手に暗殺しようとするフトドキ者わー！！」

女神「派手に暗殺って言葉として変でしょ！それから私は暗殺目的でやってきたわけではありません！」

勇者「じゃあ強盗？お金なんかないよ。だって俺様無職だモンッ（キラッ）」

女神「（「D」？） 強盗ではありません！それから威張れることじゃないでしょっ。」

勇者「i1—1i（φDφ；） i1—1i ってことは、よ……夜這い？ 俺様もしかして貞操の危機真っ只中ッ？」

女神「、（#。D）ノ もっと違いますッ！！私の名はアルテシア。私は貴方に勇者として、世界を平和に導くために、私と共に魔王と戦ってほしいのです！！」

勇者「なあんだ。宗教の勧誘だったのか。すいませ〜ん。俺様の宗教は巨人なんでえ、新聞は読売とることに決定してるんで結構です。」

女神「宗教でもないし、新聞の勧誘でもないし、ましてや強盗でも夜這いでもありませんッ！！」

勇者「ぐ~~~~~~~~。+。*。」

女神「Σ（「D」；） いやだから寝ないでくださいってばッ！！」

勇者「（ガバツと起き上がった）つかね！！非常識！！夜這いでも強盗でも宗教勧誘でも巨人ファンでもない分際で、こんな夜中に勝手にひとんちあがりこんで、勇者になれとか魔王を倒せとか、とてもすつごく非常識！！そんなわけで、俺様寝るから！！おやすみグツナイ！！ばたんきゅう。」

女神「非常識なのは謝ります！けれど時間がないのです。魔王ピイチャン悪の手は、すぐそこまで……って全然聞いてないし……。だめだわ……。完全に爆睡してる……。明日の朝、出直してこよう……。めそめそ。」

こうして勇者ミナミンは、女神アルテシアの誘いを、初回から見事にナイガシロにしたのであった。

がんばれ、女神アルテシア！！
負けるな、女神アルテシア！！

世界の未来は、勇者ミナミンではなく、君の手にかかっている！！

続く。

2話「勇者、目覚める。」

勇者ミナミンは自分の部屋の温かいベッドの中で、うつすらと目を開き、窓の外の空を見あげた。
レースのカーテンごしから差し込む光は明るく、空は晴れ渡っている。

勇者「おお、なんていい天気なんだ。こんな日はゆっくり昼寝でもするに限るな！ってなわけで、おやすみなさ〜い。ぐ〜。」

ドンガラガッシャンぷげぽによめっしゅん。

、(#。㇏)ノー(ノ、㇏)ノ

女神「あなたッ！！どつつっただけ寝る気なんですかッ！」

勇者「誰じゃい、俺様の安眠を邪魔する奴わ！！」

女神「ゝ(*、㇏*)ノ”≡ もう完全に昼なんですよ！おまけにこれから昼寝だなんて！！いつまで待たせる気なの！！」

勇者「俺様、朝寝して・夜寝するまで昼寝して・時々起きて居眠りをする算段！！」

女神「いつそ永眠してしまいなさい！！」

勇者「収納可能なんだ。へえ、便利だな。……で？その女神様が、人間界・式本国・北魁道県・薩幌市在住の20歳無職、好きなもの巨人、集めてるものエロ本という俺様に、一体何の用事だ？」

女神「それも昨日から言ってるでしょっ！魔界の王ピイチャンが世界を闇に沈めようと企んでいるとの予言が出たのです。ですから勇者ミナミン、貴方の力を借りに来たんですよ！」

勇者「（ピ・ポ・パ）あゝもしもし。警察つか？俺様、ごく普通の平凡な無職の一般市民なんすけど。なんか頭のおかしい痴女が、俺様の芳しき汚部屋（長年開けてなかった押入れのすみっこみたいな臭いが充満）に押し掛けてきてんすよね！」

女神アルテシアは勇者ミナミンの携帯電話をひったくる。

女神「（笑顔で）あ・警察の方ですか？すみません。今の間違い電話です。頭がおかしい変態は今の男性のほうなので、どうぞお気になさらず。ピッ。（切）」

勇者「（「、口、」）誰が頭がおかしい変態じゃっ！」

女神「（メ 皿）〓 そっちこそ、誰が頭のおかしい痴女ですかッ！！」

勇者「（、ε、）朝っぱらからやってきて、初対面のパンピーを勇者よばわりする女は変態でえっす！！（断言）」

女神「い、い、（Ｔ　Ｔ）い、い、　うつうつ……こんなアホに、変態呼ばわりされるだなんて…。」

勇者「つつーかね！魔王倒せとか無理！俺様、自慢じゃないが、金も根性も実力もないざんす！（どーんと胸をはる）」

女神「本当に自慢にならないわね…。けれど、勇者ミナミン、あなたしか魔王を倒すことはできないのです。」

勇者「（「A」；）何故にツ？」

女神「あなたの家は代々勇者の家系でしょう。」

勇者「あゝなんかそゝらしゝね。うちの母ちゃんが言ってたわ、うちのハゲオヤジは昔、聖剣エクスカリバーを使える勇者だったとか何とか。」

女神「ええ、この家には代々『聖剣エクスカリバー』が伝わっているはずです。そして、ミナミン、あなたは勇者家直系、唯一の男子聖剣エクスカリバーは直系男子が20歳になると、自動的にその人物に継承され、他の人物は例え先代の勇者であろうとも、一切その聖なる力を発揮することが出来なくなってしまうのです。そして、聖剣エクスカリバーでなければ、闇の魔王を倒すことはできません。」

勇者「うえゝ。何か仏間にある床の間に、やたらゴツくて派手な剣が偉そうに飾ってるあるなゝって、前から不思議に思ってたはいたけれどもさゝ。アレ、そんなメンドクサイもんだったのかよ。」

女神「とりあえず私は『聖剣エクスカリバー』に用事があるのだけ

れど…。」

勇者「Σ（「Д」；）にやんですとう？」

女神「エクスカリバーは今、どこにあるのかしら？（部屋の中をキョロキョロ）」

勇者「（…；；；…）えゝ…その件についてですがゝ…諸事情とかがありましてゝもう、この家にはないのでございまするゝ。（遠い目）」

女神「Σ（一一。Д）ええっ？諸事情って何ですかっ？どういうことっ？きちんと説明してくださいっ！」

2話目にして、伝説の聖剣をさっさと紛失したらしい勇者ミナミン。魔王ピイチャン打倒の道を阻む、急転直下の大事件がいきなり勃発ッ？

聖剣エクスカリバーの行方はいかにッ？

続く。

3話「聖剣エクスカリバーの行方。」

女神「Σ(―)。(D) 聖剣エクスカリバーがここにはないって、一体どういうことですか？あの聖剣は、あなたの家でもあるナカノ家に代々伝わっている家宝のはずですよっ！」

勇者「。+。：ヾ(*・ω・)シ。。。+。 いやまあ、そーなんですけど。色々あってエ、ついどこか行っちゃったってゆうかあゝ。」

女神「女子高生口調で言い訳してないで、ちゃんと答えてくださいっ！聖剣はどうなったのっ？」

勇者「（遠い目をしながら回想開始）そう……あれは卑怯な畏だったのだ……。」

女神「畏にハメられて、聖剣を奪われてしまったってことですかっ？」

勇者「ハイ。その通りにございます。（何故かとても殊勝な態度）」

女神「何としても聖剣を取り戻さなければ、世界は魔王ピイチヤンの手に落ちてしまう……！一体、どんな敵に奪われたのですかっ？」

勇者「えー…あれはかれこれ1週間ほど前のこと……。近所に住んでる友達の、ハラと、ハルユキと、ゴンちゃんの3人で、雀荘に入りましたですな……。」

女神「……………今、皆まで言わずともオチ見えたんですが

…。まさか賭け麻雀で負けて、スカンピンになり、借金代わりに聖剣エクスカリバーを渡したりとかしてないでしょうね…。」

勇者「ぐ（＊、ダ＊）ノ”シ 違うんだ！あれは俺様、ハメられたんだ！！ゴンちゃんときたら、超特技・国土無双を出しやがったんですよ！！ありえん！！あれは詐欺だ！！間違いねえ！！確信をもって断言するッ！！！」

女神「、（＃。ダ）ノ「ガッ？（ノ、ダ）ノ」

勇者「・・・（Pダ、q。）・・・痛いッ！暴力反対！！」

女神「（、ダ） ハメられたかどーかは知ったこっちゃありませんよ！つまり、聖剣エクスカリバーはゴンちゃんという方のおうちにあるのねッ？」

勇者「ういうゝい。」

女神「一刻も早く取り戻さないと！もし聖剣が魔王の手に渡ってしまったら、世界が終わってしまうわ！行きますよ、勇者ミナミン！ゴンちゃんのうちへ！！！」

勇者「えゝ。（不満げ）朝ごはん食べてからでいゝいゝ？あと、俺様、うんこしたいゝ。」

女神「えゝじゃありません！！つか、朝ごはんも何も、もう昼ですッ！うんこしたら、今すぐ行きますよッ！」

勇者「へいへい。」

勇者を卑劣な畏（笑）に嵌め、聖剣を奪ったのは、ゴンちゃんという男らしい！

女神アルテシアと、勇者ミナミンは、無事聖剣を取り戻すことが出来るのであろうか？

続く。

4話「親切ゴンちゃん。」

ゴンちゃん宅に到着し、家の前に佇む二人。

女神アルテシアは、おんぼろ木造建築2階建ての家屋を見上げた。

女神「ここですね…ゴンちゃんのおうちは。ここに聖剣エクスカリバーがあるのですねっ？」

勇者「た…たぶん…。(自信なさげ)」

女神「(「A」?) たぶんじゃありませんッ！聖剣を取り戻さないで、魔王ピイチヤンを倒せないんですよっ！」

勇者「賭け麻雀で負けたカタに聖剣取られちまったからなァ…。ゴンちゃん、タダで返してくれっかなあ…。俺様、只今、一銭も持っていないぜよ。」

女神「とにかくゴンちゃんに会ってみましょう。こゝんにちわっ…！」

パタンとドアが開く。

ゴン「誰じゃい、こんな朝っぱらから玄関先でデカイ声を出すのわ…！！w(「」)w」

女神「すいません…もう午後なんですけど…。しかも髪の毛にバ

ツチリ寝ぐせついでるし…。って、ちょっと、勇者ミナミン！あなたの友達、みんなこんなだらしない生活習慣の人たちばかりなの？」

勇者「ウイ。おおむね夜行性の連中ばかりなのであった。」

ゴン「おう、なんだミナミンじゃねえか！どうしたい、何か用か？ところで誰なんだ、このイカれたズルズルのコスプレをした、長い髪のねえちゃんは。もしかして、デリバリー売春で3Pのお誘い？」

女神「…、…、（T T）…、…、1話で登場した時、淫夢見た勇者といい、このゴンちゃんといい、食う・寝る・ヤル。しか脳みそに入っていないのかしら…。類友…：類友だわ…。（溜息）」

勇者「いやいや、ゴンちゃんよ。残念ながら今日の俺様、3Pのお誘いではないのだ。こないだ俺様、ゴンちゃんに聖剣あげちゃったじゃん？」

ゴン「ああ、あの家宝だったとかいう剣か！」

女神「（ノ。□。）ノ　そうです、それですっ！今、どこにあるのですか？私達には、聖剣が必要なのですっ！」

ゴン「（申し訳なさそうな顔をして頭をぼりぼりかく）いや…：…それがよお…：。」

女神「（…：…：…：…：…：…：）まさか、もう悪の手先に獲られてしまったとか、売ってしまったとかっ？」

ゴン「いやいや、ちゃんとうちにはあるぜ。まあ、確かにあれは俺が麻雀で勝って賞品代わりにもらったもんだけださ。けど元は友達のもんだし、いつか返して欲しいなんて話になるかと思って、手元に置いておいたんだ。つーか、俺が持つてても使い道ねえし。」

女神「。。。ノ、。。。あ……。ありがとうございますううー!!!（感涙）さっき類友とか罵って申し訳ありませんでしたっ！勇者ミナミン、あなたはいいお友達をお持ちなのねっ!!!」

勇者「（「A」？） ゲンキな女だな、オイ。」

ゴン「それがなあ……。礼を言うのは、まだ早いと思うぜ。まあ、百聞は一見にしかずだ。とりあえず、2人とも、立ち話も何だから、うちの中に入れよ。」

勇者ミナミンの友達の割には、ゴンちゃんは案外マトモな人（ちよつとお寝坊さんなのが玉に傷）だったようだ。

聖剣エクスカリバーも、どうやら無事だったらしい。

だが、ゴンちゃんの煮え切らない様子からして、どうやら聖剣に何か異変がっ？

どうした、聖剣!!!

どうなる、世界!!!

まだまだ勇者ミナミンと、女神アルテシアの旅は始まったばかりだ!!!

続く。

5話「恐怖の漬物ババア。」

ゴン「とりあえず、2人とも、立ち話も何だから、うちの中に入れよ。」

勇者「（・・）」「うーい。おっじゃましま〜っす。」

女神「聖剣エクスカリバーはちゃんとあるのかしら…？（どきどき）」

ゴン「おーい。ばあちゃ〜ん！」

ゴンちゃんが奥の台所に向かって叫ぶと、腰の曲がったしわくちやの老婆がよたよたと出てくる。

勇者「（o、）」「うーいす。ばーちゃん、お久しぶりー！まだ死んでなかったのか！」

老婆「かかかかか。あたしゃまだまだ若いよ。たったの92歳だよ。」

女神「（*、ω、*）」「まあ、お元気でいらっしやいますこと。」

老婆「おんやまあ、よく見たら、おめえさん、饅頭屋のミナミンくんでねが〜。んまア立派になっ……てないのう。ちつとも。」

勇者「（A、？）」「社交辞令ぐらいサービスで言わんかい、ク

ソババア。」

老婆「隣の子は嫁さんかい。あらまア別嬪さんだところ。なんじやいなんじやい、うまいことやりおって〜！イヒヒヒヒ。」

女神「（＊、ω、）　いいえッ、決してッ！！断じて嫁などではございません。おばあさまッ！！」

老婆「んだども、ちょっとケツが小っさいんでねが？　もっとう、おなこのケツはボーンとしてねえと、元気な赤ちゃんは産めねえど！！」

女神「Σ（〃、∟、〃）　ケ…ケツ？いえだから、私は嫁などでは……」

老婆「かかかかか。あたしゃまだまだ若いよ。たったの92歳だよ。」

女神「……………」

ゴン「すまん、ねえちゃん。うちのばあちゃん、耳が遠いんだ。ちよっぴり認知症も入ってるし。」

老婆「、（＃、∟、）っ　誰が耳が遠くて、認知症が入ってるってッ？あたしゃまだ、たったの92歳だよ！！！！」

勇者「うゝん、相変わらず都合よくタチの悪いババアだ。こういうババアに限って長生きだけはするからな。」

女神「ババ……いえ、おばあさまの件はおいておくとして、ゴン様、

聖剣エクスカリバーはどこにあるのでしょうか？」

ゴン「……いや、えゝとな…台所にあることにはあるんだけど…」

ゴンちゃんは申し訳なさそうな顔をしながら、台所の隅を指差した。そこには、大きな瓶が置いてある。

勇者「何だ？この大瓶？」

老婆「ああ、それはアタシが漬けている又カミソ漬けの瓶さ。又カミソつてのは、大変でなア。毎日こうして掻き混ぜなきゃならんのだよ。」

ババアは瓶の蓋を開けると、隣に置いてあつた聖剣エクスカリバーで又カミソをぐっちゃぐっちゃとかき混ぜ……

勇者「Σ（「□ 111」） って……ババア——！！！！ちよつと待ったアアアア！！！！！」

老婆「なんじゃい、いきなり大声出して。（どぶつ。ぐりぐりぐり。孫のゴンが持って帰ってきたこの棒、又カミソ混ぜるのに丁度良い長さで幅でう。おゝ今日も芳しい良い香りがするぞえ。」

女神「ゝゝゝ（「T T」）ゝゝゝ ああああああゝ。」

ゴン「（「ハ―ハゝ」） ばあちゃん。悪いんだけどそれ、又カミソ混

ぜ器じゃねんだとよ。元々ミナミンの持ち物で、返してやりたいんだ。ばあちゃんにはまた、俺がちょうどいい長さのヘラを買ってやるよ。100均で。」

老婆「ありやまあ、そうだったのかい。どおりでちよつと重たいと思っておったんじゃ。ほれ、持ってけ、ミナミンちゃん。」

勇者「（し、口、し）し 臭ッ！！超又カミソ臭ッッッッッ！！」

聖剣エクスカリバーは無事だった……が、別の意味ちつとも無事ではなかった！

勇者御一行様は又カミソ臭くなった聖剣エクスカリバーで、果たして魔王を倒すことが出来るのであろうかッ？

魔王もいい迷惑だ！！

続く。

6話「新たなる聖剣！（ビニール袋入り）」

勇者ミナミンと女神アルテシアは、聖剣エクスカリバーにこびりついたヌカミソを落とすため、ゴンちゃん宅の風呂場を借りることにした。

女神「（ごしごしごしごし）うつつうつ……ヌカミソは落ちたけど、匂いが消えない〜いいいい！！」

勇者「（くんくんくん）うつわ〜ホントだ〜くっさ〜い！！いや〜ん！！」

女神「山（。 山 山） 乙女の真似しながら、他人事のように言わないでくださいよ！！もとはといえば、あなたが麻雀で負けて聖剣をゴンちゃんに獲られてしまったから、こんなことになってしまったんですよ！！」

勇者「（；w；） うつつ……そうだった……。反省。しょぼん。」

女神「Σ（´・ω・111） えっ？いきなり素直な態度？ いえいえ、一応ヌカミソの匂いが染み付いてしまった以外は聖剣は無事だったんですよ、そんなに落ち込むことは……」

勇者「チキシヨウ、あそこで俺様があの牌を捨てずにいれば、ゴンちゃんに勝っていたものを！！ 悔やんでも悔やみきれぬ！！きつと次こそは勝あつ！！（決意）」

女神「（-△-；） ……反省って、麻雀に負けたことに対する反

省の方ですか……。ていうか、全く反省してませんね、ミナミン……」

勇者「で・さーあ。これからどーすんの？ まさかその聖剣持ち歩けとか言わないよネ？」

女神「（、、＃） 持ち歩かないで、どうやって魔王ピイチャンを倒す気なんですかつ！」

勇者「いやだつてその聖剣、持ち歩いたが最後、別の意味でこの街の勇者になっちまうぞー！」

女神「、、、（ＴＴ）、、、 そうなんですよねえ。問題はそこなんです。こんな又カミソ聖剣では、魔王に辿り着く前に、世間の笑いものになってしまっわ……。」

勇者「Σ（；、、、Δ・、） そうだつー！俺様、いいこと思いついたー！！（勇者ミナミンの頭上に、豆電球がピコーンと灯る）」

女神「。＋・（・・） 。＋。 えっ？何かいい案でもっ？」

勇者「今日からこの聖剣の名前は、エクスカリバーではなく、『聖剣 又カミソード』と呼ぼうー！！！」

女神「山（。Δ山） 名前が状況にピッタリ適確になってしまったというだけで、問題は何一つ解決してないじゃないですか——
——！！！」

勇者「……＋。・（（＊。・）（。・。 よく伝説の剣つて斬つたら炎が出るとか、凍りつくとか、連動して魔力効果あったりする

べ？ 斬ったら又カミソ臭がこびりつく聖剣、今、ここに誕生！
むしろ積極的にもっとたくさん又カミソを塗ったくつとくべき！！
（何かとっても素晴らしいことを考えついた的、誇らしげな表情）「

女神「（L、口、；）L どんだけ無駄な方向にポジティブなん
ですか！ 斬った敵が又カミソ臭に悶える前に、常時持ち歩いてい
る私たちの方が、臭気にあてられて悶絶死してしまいますよ！」

風呂場のドアがパタツと開いて、ゴンちゃんが顔を出す。

ゴン「おう、どうだ？又カミソは落ちたか？」

女神「・・・（PD、q）・・・ 臭いが全然落ちないんですう
ううゝ！こんな凄まじい臭いが染み付いた聖剣持ち歩いて、魔王ピ
イチャンのところになんて行けないゝいい！！うわゝん！！」

ゴン「そうじゃないかと思ってよ。ほれ。」

勇者「（。・D・） あ、透明なビニール袋だ。」

ゴン「d（ゝω・*） これに入れて歩けば、とりあえず匂いは防
げるだろ。」

勇者「おう、サンキュー！助かるわ！」

女神「・・・（PD、q）・・・ 聖剣をビニール袋に入れたま
ま、魔王を倒しに行く勇者なんて聞いたことないいいゝ！！力
ツコ悪すぎますううう！！ うわぁん！！」

勇者「ゴチャゴチャ五月蠅い女だな。もうヌカミソードになっちゃったもんは仕方ないだろうが！」

女神「。。。ノド。。。あああああ、もう名前がすっかりヌカミソードで定着しちゃっているうううう!!」

勇者「じゃあな、ゴンちゃん。色々世話になったな。そろそろ俺様たち、魔王退治に出かけるわ。」

ゴン「おう。ま、ほどほどに頑張れよ!!」

こうして新たな名前となった聖剣ヌカミソード（ビニール袋入り）を携え、女神アルテシアと勇者ミナミンの伝説の旅が、よ・う・や・く始まったのだった!

果たして勇者ミナミンと女神アルテシアは魔王ピイチャンを倒せるのだろうか?

っていうか、そもそもこんな調子で、魔王ピイチャンのところまで辿り着けるのだろうか?

ぐうたらニートだった勇者ミナミン、そもそも魔王のところに行く気があるのかどうかすら怪しいぞ!

頑張れ、女神アルテシア!

君の苦勞はまだまだ始まったばかりだ!!

続く。

7話「パチンコ屋と魔王の因果関係についての考察。」

女神「さて。無事……じゃありませんけど、どうにか聖剣エクスカリバーも取り戻したことだし、魔王を倒すためには、我々の他にも仲間が必要ですよね。」

勇者「げっ、うつそ！マジで魔王討伐に行くの？俺様もっ？」

女神「（「A」？） 7話まできてるのに、この話の存在意義ですらある超基本初期設定にツツコミ入れないでもらえます……？」

勇者「えゝいやゝん。行きたくないいいいいゝ。俺様、おうちでネトゲしなきゃなんないしい。」

女神「ある意味、魔王討伐は人生と世界を賭けた大ゲームじゃないですか。」

勇者「チツチツチツ。わかってないなゝ。ゲームっていうのは、自分が傷つかないからこそやって楽しいわけよ。大きな代償を伴う戦いは楽しめないし、だったらやる意味すらないの！おわかり？」

女神「ゲームに関してのあなたの意見はよく判りましたが、魔王討伐をやる意味がないという点に関しては賛同しかねます。別にあなたの意見は聞いてませんからっ。」

勇者「（メ 皿）＝3 ぎゃぼー！！強制イベント発動とは、横暴ナリ——！！！！」

女神「……で。魔王を倒すために協力してくれるような、ちゃんと

した仲間を探さなければならぬわけですが。(スルー)」

勇者「、、(T T)、、うううう……さすがは強制イベントだ……。俺様の意思に関係なく、ずんどこ話が進んでゆく……」

女神「まずミナミンが聖剣を持つ剣士でしょ。私は白魔法を使えますから、後は黒魔導士や召喚士など、攻撃系魔法使いと、武闘家・騎士あたりに分類されるような体力のある方が欲しいですね。」

勇者「うむ。スロットの達人や、パチスロファイター、冬ソナ機コンプリーターなども欲しいところだな。(神妙な顔つきで検討に参加)」

女神「遊び人(ひと括り)は不要ですッ！てか、パチンコ屋に魔王はいません……！」

勇者「Σ(。；) ば……馬鹿なッ！！魔王ともあろう者が、パチンコ屋に通っておらぬとわ！！童貞を死守するよりも愚かで恥ずべき行為じゃないか……！」

女神「魔王ともあろう者がパチンコ屋通い必須って……ミナミン、あなた、どうでもいいところで魔王の存在を買いかぶってませんか……。ああ、もう、あなたと話をしていると、どんどん本筋から逸れていってしまうわ。とにかく仲間よ仲間！ミナミンの知り合いに、パチンコ通いをしていない、真面目な黒魔導士や騎士はいないの？」

勇者「(。A。(」 黒魔導士や騎士だとかいう以前に、この俺様の知り合いで真面目なヤツなぞ一人もおらぬわ！！ましてや、パチンコ通いしてない愚か者になぞ、知り合う機会があるはずがない……ふはははは……！」

女神「(丁皿丁) 何故、そこで威張れるのが、さっぱり理解できません…。」

勇者「おお、そうだ！(手をぼん)パチンコ屋以外で、黒魔導士や騎士をナンパできそうな場所には心当たりがあるぞ！」

女神「(、・Δ・;) えっ、本当につ？どこですか、そこはっ！」

勇者「ズバリ、そこは『酒場』でっす！！世界の悪を倒すため仲間を求める志の高い連中が集う定番の場所、それは酒場！！もう、酒場に行くっきゃない！！！」

女神「(*´、*´)ノ。+。*。 まあ、人間界にはそんな便利でポジティブな集いの場があるのね？素晴らしいわ！早速そこに行きましょう！」

勇者「(＜＞)ノ ちょうどいい具合に、陽も暮れてきたし、腹も減ったことだしな！よっしゃ、酒場へレッツゴー！！！」

かくて、勇者ミナミンと女神アルテシアは、仲間を求めて町の酒場へ行くことにしたのだった。

だが普通、酒場ににいるのは黒魔導士や騎士ではなく、ただの酔っ払いだ！！

しかもどう考えても、勇者ミナミンは飲み代を持っていないぞ！！騙されるな、女神アルテシア！！

毎回ピンチ続きまくりだ、どうなる勇者御一行様ツ！？

続く。

と待つてください、勇者ミナミン！ミイラではありません。見た目はミイラに果てしなく近いですが、その方はきちんと生きていらっしゃるみたいですよ。」

ミイラ「ふっひょっひょっひょっ！ミイラとは失礼な連中じゃな！」

女神「おじいさん、連れのミナミンが、失礼なことを言ってしまったて、申し訳ありません。」

勇者「（「——」） いや……お前だつてさつき、『見た目はミイラに果てしなく近い』とか、凄い失礼なこと言ってたぞ……。」

女神「（コホンと咳払い）で、おじいさん、どうなさったのですか？私達に何か御用でしょうか。」

実は生きてたミイラじじい「お主ら、さきほど、魔王ピイチャンを倒すとか何とかゆーとらんかったかの？」

女神「ええ。私達は魔王ピイチャンを倒すべく、仲間を探している最中なのです。」

突然、ミイラじじいの両目から大粒の涙が、鼻からは鼻水が溢れ出た。

勇者「ギャツ。汚ねッ！（、旦那）」

ミイラじじい「（おうおうと泣く）やっと……やっと、魔王を倒すという若者に出会えた！苦節30年、ここで待っていた甲斐があった

というものじゃー！やはり志の高い若者は酒場に集うという、人間の話は本当だったのじゃな！」

勇者「アホか！志の高い若者が居酒屋なんかにいるかつ！酒場に
いるのは普通、ただの酔っ払いばかりだ！」

女神「Σ（「□ 111」）……えっ？」

勇者「えーごほんごほん。で、アルテシアちゃん。魔王30年放置
プレイでも、世の中平和なんだから、別にあと300年ぐらいほっ
たらかしといても、世界は平和なままなんじゃないのかね？」

女神「（溜息）それがねえ……神界も最初はそう思っていて、魔王
ピイチャンが誕生したのは知っていたけれど、実害あるわけじゃな
しってんで対策はうたなかったんですよね。それが最近になってか
ら、魔王ピイチャンったら急にヤル気を出してきたみたいで、神界
に対して挑戦状とか、テロ予告とか、卑猥な写メ画像とかを、ばん
ばん送りつけてくるようになったんです。それでお父様がすっかり
お怒りになっちゃって。まあ、魔王を倒さなければならぬという
根拠はそれだけではないんですが……。」

勇者「魔王ピイチャンに何があつたんだ！つか、卑猥な写メ画像を
頼んでもいないのに先方から送ってくれるだなんて、むしろいい奴
のすることじゃないか！喜んでもらっとけよ！俺様にも送っていた
だきたいわい！……。」

女神「（*、ω、） 神界はセクハラにうるさいんです。卑猥
画像は全面禁止なのですっ……！」

勇者「Σ（――。㇏） エロ画像全て禁止だ……と……？ありえん

！！許すまじ、神界！！俺様に滅ぼしたいのは、むしろ神界のほうだ！！」

女神「、、（ＴＴ）、、話が途中から全部、卑猥な写メのことになってるんですけど……。」

ミイラじじい「アルテシア……それに神界ですとっ？では、あなた様はもしか、大神ゼー스様のお子様１８人の中の末娘、アルテシア様では……？」

女神「はい、その通りですが、私のことをご存知なのですか？」

勇者「（-”-）……ちよつと待てい。お前、今、１８人兄弟だとか言わなかったか？」

女神「ええ、そうですけど。私には兄が７人、姉が１０人おりますが、それが何か？」

勇者「（ $\angle$ 、口；） $\angle$ 何か？じゃねえよ！エロ画像を全て禁止しておきながら、その子沢山っぷり！お前の親父、どれだけ夜に励んだんだよ！汚ねえぞ、権力者！！もう許せん！（どっかーん！！：背景で火山が噴火）俺様、魔王討伐はもうヤメる！！今、この瞬間から魔王側に加担する所存！！」

ミイラじじい「アルテシア様は噂に違わずお美しいですのう。お姉さま方もきつと皆、お美しいのでしょうなあ。」

勇者「Σ（；・・、 Δ ・） え？今、お姉さまとか言ってたっ？そうかつ！すいません、嘘ですっ。俺様、さくつと魔王پیイチャンを討伐いたします！そして熟女のお姉さま方１０人に、よってたかつ

て誉めていただきます。ぐふふふ。(めくるめく夢の妄想タイムへ突入)」

女神「、、、、(ＴＴ)、、、、 どうしてこんな、信念はないのに邪念はたつぷりの男が、世界を救う勇者なんでしょう…?」

ミイラじじい「おお、女神様と勇者様でしたか。素晴らしい!…
…実は折り入ってお願いしたいことがあるのですじゃ!」

どうやら勇者ミナミンはムッチリ熟女がお好みらしい。

アルテシア(清楚スレンダー系)はミナミンのストライクゾーンからはまるつきり圏外のようなのである。

ところで、ミイラじじいの「お願い」とは一体何なのだろう?

続く。

9話「ミイラじいさんのお願い。」

とりあえず店員の案内で、酒場の一番奥の個室に通された3人であった。

ミイラじい「早速ですが、勇者様、ワシの願いというのは……」

勇者「♪（o、）／（ピンポン ↑呼び鈴）注文お願いしまあす！えつとね、俺様、まず生ビールね。あと、たちポンと、ネギトロと、鮭のハラス焼きと、鶏のからあげとお……」

女神「（ω、；） すいません……おじいさん。この人、胃袋が満たされないと脳が働かないんです……。」

ミイラじい「おっと失礼、これはワシが無粋でしたな。ここで出会えたのも、何かのご縁。ここのお代はワシが全てもちますゆえ、お二人とも遠慮せず飲み食いしてくださいませ。」

勇者「（目をキラキラさせて、ジジイの手をガシツと掴む）有難う、おじいさまっ！！刺身盛り合わせもお願いしていいっ？」

女神「ミナミン！さっきから肉や魚ばかりではないですか。野菜も頼みましょう。すいませ〜ん、この大根サラダお願いしまあす。」

じきに、それぞれの飲み物が運ばれてくる。

勇者「じゃ、とりあえず、俺様の今後の健闘を祈って、カンパニー」

女神「自分で自分の健闘を祈るっていう名目で、自分で乾杯の音頭をとる人を始めて見ました。」

勇者「（ビールを口に含みながら）……で？じいさん、俺様たちに頼みって何よ？仲間にしてくれとか言うんなら、願い下げだぞ。魔王を討伐する勇者様のパーティには、ボインの女の子しか入れない決まりになっておるのだ。」

女神「Σ（「Д」；）　ちょっと！いつから、そんな決まりが出来たんですかつ！」

ミイラじじい「ふひよひよひよ。いやいや、この老体で長旅はもう無理ですじゃ。願いというのは全く別のもの。」

勇者「それを聞いて安心したぜ。」

ミイラじじい「そういえば、まだ自己紹介もしておりませなんだな。実はワシ、魔王ピイチヤンの守役を務めております、魔界の四大悪魔伯爵のうちの一人、ライーミというものでして。」

勇者ミナミン、飲んでたビールをブーツと噴射。

ミナミンの正面に座っていた悪魔伯爵ライーミ……めんどくさいな……いや、ミイラじじいで……ミイラじじいはビールまみれとなった。

女神「(: . . . ; D ; . . .) はいいいい???魔界の四大悪魔伯爵ううう???」

勇者「ΣΣ (— — — □ — — — ; ;) おいいいいいい!!めっちゃ敵じゃん——!!乾杯してる場合じゃねえつつの!!俺様達、まだばりばりレベル1なのに、いきなり最強四天王の一人みたいなの出てきちゃってんよ、しかも近所の居酒屋で!!四天王は四天王らしく、ラストダンジョンの通路の真ん中(一本道なので、回避不能)とかで、踏ん張ってるべき!!……ハッ……ちよつと待て、もしかしてこのビール、毒ツ?」

女神「(° D ; ≡ ; D) ええええっ?私、大根サラダ、もうつまんじやいました——!!」

ミイラじじい「ふひよひよ。ご安心ください。年老いたとはいえ、このライーミ、四大悪魔伯爵の誇りがございます。毒殺などという、姑息な真似はいたしませぬゆえ。」

女神「(* ω *) ほっ。そうですか。良かった。」

勇者「アル、何で敵を信用してホッとしてんだ!つか、四大悪魔伯爵様が、レベル1の俺様たちに何のご用なわけっ?断っておくけど、俺様たち金も実力も、アルに至っては胸もないんだぞっ!!」

女神「山(° D 山) 私の名前はアル、テ・シ・アです!気安くショートカットしないでッ!それから、私の胸のことは放っておいてください!!」

ミイラじじい「金も実力もおっぱいもいりませぬ。実はワシの頼みとは、勇者様と女神様に書いていたきたいものがあるのですじゃ。」

「

ついに判明！！アルテシアは実は貧乳だった！！（本筋にどうでもよさげな事項を重要視して、一番最初にもってくる）

それはともかく、いきなり登場した魔界の四大悪魔伯爵のうちの一人、ライーミ！！

彼が女神アルテシアと勇者ミナミンに書いて欲しいものとは一体ツ？次回、とっても急展開の予感！？

続く。

10話「神界vs魔界の伝説！」

ミイラじじいはおもむろに白い紙と筆を懷から取り出し、アルテシアとミナミンの前に置いた。

ミイラじじい「女神アルテシア様と勇者ミナミン様に、ずばり！ワシが書いてもらいたいのは、我が主、魔王ピイチャンに対する、『挑戦状』ですちゃー！！」

女神「魔王宛の挑戦状というと、『今からお前を倒しに行くぞ』とか、『巨悪許すまじ！』とか、そんな感じの文書のことでしょうか？」

ミイラじじい「はい。その通りでございますじゃ。」

勇者「w（ ; ）w 挑戦状？ なして、そげな面倒臭いものをー！！」

ミイラじじい「その理由を話す前に確認しておきたいのですが、お二人は500年前に起こった、魔界と神界の大戦争のことを詳しくご存知ですか？」

勇者「（???） いんや。すつげえ、全く、これっぽっちも知りやしねー。」

女神「……ミナミン……。これ、人間界では誰もが小学校で習うような、有名な伝説のはずなんですけどー！」

勇者「この俺様を見くびらないでもらおう！！俺様が小学校の授業で起きていたことなど、あるわけがないっ！！（どーん）」

女神「見得をはらないください。小学校だけじゃなく、中学校でも高校でも、起きてたことなんかないくせに。」

勇者「Σ（；・・・Δ・ゝ）いきなり鋭いツツコミをかましてきやがったな！！フツ……成長したな、アル！！胸以外のところが！！」

女神「山（。Δ山）胸のことはほつといてって、さっきから言ってるでしょうッ？」

ミイラじじい「（回想モード）……そう……今を遡ること、500年前……。先代の魔王アストロゼブ様率いる魔界軍、ゼーヌ王率いる神界軍が、世界の命運を賭けて激突したのじゃった……！」

勇者「……（……）。……あつちや。ミイラじじい、勝手にノリノリで話し出しゃったよ。しかもこれ、何かこの物語の背景（今更）に関わる的な話っポイしい。うっわゝ絶対、話長くなりそーだゝ。めんどウザゝい。（おもむろにピンポン）すっいませゝん、焼酎と、フライドポテトと、軟骨のから揚げと、豚串追加でお願いしまゝす！」

女神「ミナミンったら、また肉ばかり頼んで。あ、私、このイチゴクレープというものが食べてみたいですゝ！」

ミイラじじい「それはそれは激しい戦いじゃった！！勿論、その戦いには、ワシも参加しておったぞい！！両雄は一步も引かず、魔王と大神の力がぶつかり合った影響で、海はうねり、空は荒れ狂い、

火山は次々と炎を噴き上げたのぢや！！戦いは100日もの間続き……（以下、ミイラじじいの大活躍物語が始まるが、長いので割愛）
「

勇者「Σ（「□lll」）げ。アル、お前、もう甘いもののいくの？目の前が甘くなつて気色悪くなるから、頼んじゃ、めつ。」

女神「（TεT） えゝいいじゃないですかゝ！けちゝ！」

ミイラじじい「……その時、ワシは咄嗟に敵の刃を交わし、我が究極の魔術をおまいしてやつ……（相変わらずミイラじじいの大活躍物語が続いているが、誰も聞きたくなさげなので省略）」

勇者「甘いのが欲しいなら、せめてホラ、このメニューに載ってる、梅酒サワーアイスってヤツにしろよ。こっちの方がアツサリしてそーだ。」

女神「まあ、梅酒サワーの上に、アイスクリームを乗せたオススメの一品ですつて。美味しそうゝ。これにしようかなゝゝ」

ミイラじじい「こうして、イチゴクレープと、梅酒サワーアイスの戦いは佳境を迎え、梅酒サワーアイスの勝利に終わった……って、あれ？」

勇者「お・話終わった？あ、じいさんが話している間に、じいさんの分のつくねの追加、頼んどいたぜ。」

ミイラじじい「おお、これはかたじけない。……って、お前ら！！ワシの話を聞け——！！！！（がっしゃゝん！！！！）」

女神「で、まあ、おじいさんの話を要約すると、神界と魔界の大戦争が500年前にあつて、必然的に二つの世界の中間に位置していた人間界が戦場になっちゃったんです。迷惑した人間は、神界側に加担することになりました。で、神界と協力して、必殺兵器・聖剣エクスカリバーを作り、人間代表の勇者は聖剣を使つて魔王を倒しましたとさ。めでたしめでたしっ。」

ミイラじじい「(ノTOT)ノ …… …… ……
ワシの熱弁を、あっさりまとめるな———!!」

勇者「チッ。結局、どうして俺様達が魔王に挑戦状をしたためなきやなんのか、全然判明しないまま、次回へ持ち越しじゃないか!! 話分、無駄にしゃがつて!!」

ミイラじじい「山(。D山) それはお前らのせいじゃあああ
———!!」

そんなこんなで、だらりんちよの3人。
酔っ払いながら、世界の命運に関わるような、真面目な話をする方が間違っているのだっ!!

続く。

11話「ぐうたら魔王。」

女神「……で。おじいさん、どうして魔王さんに私たちが挑戦状を書く必要があるんでしょう？」

ミイラじじい「そのお話をする前に、我が魔界の王ピイちゃんのお人柄と申しますか、悪魔柄についてご説明せねばなりません。」

勇者「、(@ @)ノ 悪魔柄ってどんな柄？しましま柄？ぐるぐる柄？アハハハハ、天井がぐるぐるしてる。」

女神「(- - -) ミナミン、貴方、タダ酒だと思って飲みすぎです！」

ミイラじじい「先代の魔王であるアストロゼブ様は、持病の糖尿病が悪化してすっかり体調を崩されてな。今から30年ほど前に、先代の魔王は一人息子であらせられたピイちゃんに、王位を譲ったのでございます。」

女神「まあ、糖尿病！それは大変ですわね。私の父である神界の王者ースも高血圧とメタボで、先日お医者様に食べ過ぎ飲みすぎを注意されました。」

ミイラじじい「それはそれは。神王も魔王も、寄る年波には勝てませぬのう。」

勇者「、(*、∩ *)ノ」シ 糖尿病の魔王とか、メタボで高血圧の神王とか、聞いたことねえっ！の！なんで生活習慣病丸出しなんだよ！せめて韓ドラっぽく、体裁のいい白血病あたりをチョ

イスせんかい！つか、先代の魔王って、伝説の勇者に聖剣で斬り殺されたんじゃないの？何で糖尿病になるような齡まで、長生きしていらつしやるわけっ？」

ミイラじい「はあ。先代の魔王様は、斬られはしたものの、命には別状のない所を斬られましたのでな。」

女神「（＊、ω、＊） まあ、それはご無事で良かったですねえ。」

勇者「（「——」） 元魔王の無事を女神が喜んでどうするアル、お前、自分が魔王を倒しに行く側の立場だっつーの、忘れるだろう…。」

ミイラじい「で、ですな。話は戻りますが、このピイチャンがまた、子供の頃からヤル気のない方でしてのう…。何も悪いことをしようとしないのですじゃ。毎日部屋にひき籠っては、人間界のゲームをしたり、漫画を読んだり、だらだらしているばかり。」

勇者「ニートだな！間違いない！それはニートだな！（キラーン）」

女神「あなたのお友達ですね、ミナミン。（冷たい目でミナミンを睨む）」

勇者「（「」、口、；）」 ヲタニートと俺様と一緒にするな！俺は麻雀をしたり、パチンコをしたり、外出して金を稼いでいる！『アウトドア嗜好のプーター』だ！」

女神「いずれにせよ、全うな社会人として成り立っておらず、親に生活全般を頼っている点では、ピイチャンと同類ですっ。だいたい貴方のそのポジティブな思考の根拠はどこにあるんですかつ。」

ミイラじじい「で、見るに見かねたワシが、どうにか魔王ピイチャン様のケツを叩いて、神界に挑戦状やテロ予告などを出させて、実行させていたというわけですなのですが……」

勇者「アル、神界は何か魔王ピイチャンにテロられたわけ？」

女神「はい。神の城の外壁に『夜露死苦メカドック』と、スプレーでデカデカと落書きをされました。他にも、先ほど言いましたが、エロい画像を写メで送りつけてきたりとか。」

ミイラじじい「そのエロ画像にしても、ふんどし一丁でドヤ顔をしているピイチャン様自身のセクシーショットとか、ペットのスライムの交尾シーンとか、犬の肛門のどアップだとか、しわくちゃババアの入浴シーンの隠し撮りとかばかりなのです！」

勇者「どれもこれも、手近で無料ゲットできるエロレベルの低いものばかりではないか……」

> i 3 5 1 8 5 — 4 4 0 2 <

ミイラじじい「こんなことでは、立派な悪とは言えませぬ……！……くうっ！（思わず溢れてきてしまった涙をぬぐう）」

勇者「（じじいと一緒に涙目になりながら）くうっ！いらぬ……！そんなエロ画像はいらぬううう……！ちゅーか、それエロ画像じゃないよ……！中2男子画像だよ……！しかもメカドック……！今更メカドック……！……！！……！誰も知らんぞ、『よ。しくメカドック』な

んて古い番組！！」

女神「（両手をぱんつと合わせて）判りました！つまり、やる気の出ない魔王ピイちゃんさんに、我々が挑戦状を出すことによって、ピイちゃんの闘志に火をつけ、魔王として正しいヤル気を出してもらおうということですね！」

ミイラじじい「イエッス、その通りでございますぢや——！！
（万歳）」

女神「そういうことでしたら、お任せください！私、子供の頃から作文は得意ですの！これも人助け。困っている子羊を救うのは、女神としての勤めです。」

勇者「アル……お前、ひと良すぎ……。」

女神「（*´ω`*） まあ、そんな。誉めていただくことのことではございません。女神として当然のことですもの。」

勇者「いんや、これっぽっちも誉めちゃいねえけどな。（呆）挑戦状を書いて、ピイちゃんがやる気を出すと困るのは、俺様達の方だと思っんだが……。まあ、アルがそれでいいなら、俺様的にはどうでもいいけど。」

ミイラじじい「では、書いていただけのすなっ！」

女神「勿論です！（どーん）」

こうして女神アルテシアと、勇者ミナミンは、魔王ピイチャンに挑戦状をしたためることになった。

二人は一体、魔王にどんな挑戦文を叩きつけるのであろうか？

続く。

11話「ぐうたら魔王。」（後書き）

【どうでもいい注釈】

「よろし。メカドック」

大昔、某海賊マークの週間少年誌に掲載されていた漫画。全12巻。大雑把な内容としては、自分で整備した車が、頑張って走っている。以上。（大雑把すぎ）

12話「勇者と女神の挑戦状！」

魔王のヤル気を引き出すため、挑戦状を書くことになった勇者ミナミンと、女神アルテシア。

居酒屋の一室で、カリカリと一生懸命、何かを紙にしたためる二人。

勇者「＼（。□。）／ よっしゃアアアア！！でえきたアアアア！！」

女神「。＋・（・・）°。＋° 私も出来ましたっ」

ミイラじい「おお、有難うございます！どれどれ、まずは女神様のほうから、見せていただいてもよろしいですか？」

勇者「お、俺様にも見せろ見せろ！」

女神「（＊´ω´＊） ええ、どうぞ。」

- - - - -
- - - - -
- - - - -

【女神アルテシアの挑戦状】

拝啓 魔王ピイチャン様

こんにちは、突然のお手紙、失礼いたします。

私は女神アルテシアという者です。

このたび、故あって勇者ミナミンと一緒に、魔王ピイチャンさんに

会いにゆくこととなりました。

じきにそちらにお伺いすると思いますので、どうぞ宜しくお願いいたします。

敬具

- - - - -

勇者「……………あのさあ……………アル……………」

女神「（*^ー^*） はい、何でしょう？」

勇者「何でしょーじゃねえっつーの！！これのどこが挑戦状なわけっ？拜啓で始めて、敬具でシメてんじゃねえよ！！丁寧すぎて、何ひとつム力つくところがねえだろうが！！」

ミイラじじい「それ以前に、女神様が魔王ピイチャン様に会いにくくことは判りますが、何をしにくるつもりなのかさっぱり判りませんなあ…。」

女神「ええっ？でも、私、魔王ピイチャンさんとは初対面ですし、ご不快にさせてはいけないかと思って…。」

勇者「不快にさせねえでどうすんのよ！そもそも俺様たちは、魔王を倒しに行くんだぞ！！あのなあ、挑戦状っていうのは、もっとこう、相手の神経を逆撫するようなもんじゃないとダメなの！！見る、俺様の読んだ相手がム力つきMAXになることウケアイの、華麗なるお手紙を！！」

ミイラじい「では、勇者様のお手紙も拝見させていただきますぞ。

」

- - - - -
- - - - -

【勇者ミナミンの挑戦状】

コンニチワ。ボク、ドラ。もん。

コボちゃんの妹は、コボパパの子ではない。

マスオの子だ。

- - - - -
- - - - -

女神「Σ山（。∩；山）何ですか、これ——！！！！」

ミイラじい「Σ（∩□ 111） そうだったの——！？間

男マスオ、恐るべしぢゃああ——！！！！」

勇者「フフフ。どうだ。実によくム力つく手紙だろう！！（得意げ）

」

女神「何を威張ってるんですかっ！確かにム力つきはしますけど、ム力つく以外、挑戦状として何ひとつ目的を達していないじゃないですか！何故、ド。えもんが、コボちゃん宅にいらぬ疑惑の火種を撒き散らさなければならぬんですかッ！そもそも『ボク、ドラえもん。』とか名乗っている時点で、魔王さんに貴方からの手紙だということ判らないでしょっ！」

13話「ついに宣戦布告！恐怖！魔に沈む人間界！！」

魔王に挑戦状を書くことになった、勇者ミナミンと女神アルテシアだったが、二人とも口くでもないことしか書けなかったもんだから、ミイラじじいにアツサリとボツられた。

結局、ミイラじじいが自分で魔王に挑戦状を書いて、それに二人が同意の署名をすることになったのだが…。

- - -
- - -
- - -

【ミイラじじいの挑戦状】

正義の女神アルテシア及び勇者ミナミンは、悪の魔王ピイチャンに対し、戦いを挑む決意を固めました。

近日中に、正々堂々、魔界まで魔王を倒しに行きます。

- - -
- - -
- - -

勇者「何か、スポーツ大会の開会式の選手宣誓と、借金の借用書がゴチャマゼになったような文面だな……」。

女神「ここに署名をすればよいのですね。この下の空白に名前を書くだけでいいのかしら。ええと……アルテシアと。はい、ミナミンもちゃんと書いてくださいねっ。」

勇者「あいよ。ボク、ドラえも……（ガスッ。↑アルに殴られた音）……判ったつちゅーの！……ったく冗談の通じね〜ぶつぶつ。あいよっと。超絶勇者 ミナミン様見参！〜っと。」

女神「超絶勇者 ミナミンって……。何かバトルスーツとかに一瞬で変身できそうなネーミングですねえ。」

ミイラじじい「これでよし！早速魔王ピイちゃん様に、コレを届けてまいります！……と、その前に。」

ミイラじじいは、おもむろにスクツと立ち上がった。
ついでに、何か凜々しい顔つきになっている。

よぼよぼジジイにカツコいいオーラ出されても、かえってムカつく。

ミイラじじい「実はこの魔界の四大悪魔伯爵こと、このライーミ、女神様と勇者様にお見せしている今現在の姿は、人間界用の仮の姿でしてな。真の姿をお二方に見せておかねば、礼儀を欠いてしまいまする。」

勇者「Σ（「ム」） ナヌツ？もしかして俺様さしおいて、ジジイの変身予告っ？超絶悪魔 ミイラじじい誕生伝説をぶちあげる気かッ？（嫉妬）」

女神「（人、）、。……＊。…… まあ、本当はどんなお姿なのですか？わくわく。」

ミイラじじい「真の姿をお見せするその前に。ワシ、ちょっとおしっこに行ってきますすじゃ〜。」

勇者「は？待たせてんじゃねえよ、先に变身してからにしろよ！」

ミイラじじい「*:.。 .:.+. . (C*。°。) C°. +. .
° .:.* ギャアアア！も... もれるウウウウ」

勇者「判った判った！！大でも小でもいいから、とつと行つてこ
いっ！」

ミイラじじい、そそくさと居酒屋の個室から出てゆく。

——数分後。

居酒屋個室のフスマがスパーンと勢い良く開いた！！
と、そこには！！

いかにも悪魔貴族っぽい、豪華ズルズル極彩色キラキラ衣装を着て、
ドヤ顔をしたミイラじじいが立っているではないか！！！！

ミイラじじい「これぞ、ライーミ真の姿でござりまするッッッ！
！...！（どどーん！！！！）」

女神「...*:. . (〃〃) .:.*:. . まあ、ご立派なお姿に
！」

勇者「(メノ、皿)ノ... ！ . . . ちよつと待たんか——
——！！！！どどーんじゃねえつつの！！アルも感動してんじゃねえよ
！！着替えてきたよねッ？今、明らかにトイレで着替えてきたよね
ッ？つか、コスプレしてきただけで、中身はミイラじじいのまま
だよなッ？何ひとつ変身っぽいもの、してないよねッ？」

ミイラじじい「そんなことはないぞよ、勇者様。ほれ、これを見なされ！」

ミイラじじいは勇者たちに向かって、くるりと背を向けた。

じじいのお尻のあたりに、いかにも悪魔っぽい、黒く細長いしっぽがプランプランと揺れている。

ミイラじじい「ご覧下さい！このしっぽこそが、悪魔の証なのでござりまする！」

勇者「ど——でもいーわ！！そんな証！！おい、アル。このしっぽ斬っていか？ちようど俺様、聖剣ヌカミソード（ビニール袋入り）も持ってるしっ。」

女神「（「、口、」）」ヌカミソードじゃありませんったら！！その剣の名前はエクスカリバーですっ！」

ミイラじじい「ぬう？こちらが礼を尽くして謙虚に接待しておるというのに、勇者のこの態度は何たることじゃ！このライーミ、怒りましたぞ！」

怒り心頭のミイラじじいは、ズルズル衣装の懷から水晶玉を取り出すと、パカーンと床に叩き付けた！
粉々に砕け散る水晶玉！

勇者「ぎゃわっ！破片が飛んできたっ、危ねっ！……ん？水晶玉の破片から、どうんとした黒い空気みたいなのが出てきて、広がっていったぞ……？」

女神「Σ（「□ 111」） ま……まさか、今の水晶玉は……！」

勇者「え？何？何？ガラス爆弾攻撃とかじゃなかったのっ？」

女神「今の水晶玉はおそらく『魔界の悪魔・詰め合わせセット玉（黒）』ですっ！叩き割ると、その周辺地域に大量の低級悪魔が出てきてしまうのですっ！」

ミイラじじい「女神様はお察しが早い！その通りぢゃー！ふっひよっひよっひよっひよっ……！」

ついに真の姿^{「コメレ」}となり、悪魔の本性を剥き出しにしてきた、魔界の大悪魔伯爵ライーミ！！

ミイラじじいは、人間界を悪魔でいっぱいにしてしまっつもりらしい！

どうやら本当に世界のピンチに突入っばいぞ！！

どうする勇者ミナミン＆女神アルテシア！！

世界が破滅したら、明らかにあんたたちの責任だッ！！

続く。

14話「勇者、生まれてはじめて凛々しく戦うッ！」

さっきまで仲良く酒を飲んでいたはずだったのだが、突然何かのス
イツチが入ったらしく、勇者ミナミンと女神アルテシアに魔物の牙
を剥いた、魔界の四大悪魔伯爵ライーミことミイラじじい！！
じじいの放った『魔界の悪魔・詰め合わせセット玉（黒）』のせいで、人間界に魔界の悪魔が溢れてしまうことになってしまった！

ミイラじじい「（メ 皿）＝3 勇者め、酒をおごってやった恩も忘れて、よくもワシの悪魔のしっぱを聖剣で斬りおとそうとしようたな！！」

勇者「ゞ（＊、△＊）ノ”≡ やかましいわい！！プラプラしやがって、目障りなんじゃ、そのしっぱ！！」

女神「ちよつとちよつとミナミン！！（女神、勇者を部屋の隅に引きずっていき、耳うちする。）」

勇者「何じゃい！！アル！邪魔すんな！！」

女神「ミナミン、あの悪魔のしっぱは、本当に魔族にとっての誇りなんですってば！神族における天使の羽ぐらいの価値があるものなんですよっ！！」

勇者「Σ（-□-；）！！ えゝ？そーゆーモンなの？つまり悪魔のしっぱって、男におけるタマタマ様ぐらいの価値があるってこと？」

女神「（、×、；） 私は女だから、タマタマ様の価値は判りませんっ。ミナミン、下ネタ多すぎっ。」

勇者「いいか、タマタマというものはだな、タマタマというものはだなぁ〜!!」

女神「うるさい、酔っ払ってるでしょ!で、話を元に戻しますけど、しっぱは斬りおとされてしまうと、その悪魔は魔力を失ってしまいます。勿論、魔力の源であるしっぱは、そう簡単に斬りおとすことはできません。」

勇者「タマタマだって切り落とすと生殖能力が……」

女神「（無視）そこで作られたのが、聖剣エクスカリバーです。エクスカリバーは悪魔のしっぱを斬りおとすために必要な、聖なる力を持った魔法剣なのです。500年前に起こった神界と魔界の大戦争の時も、当時の魔王アストロゼブ王のしっぱを、あなたのご先祖である勇者が、聖剣エクスカリバーを使って斬りおとしました。それで魔王アストロゼブは力を失い、神界と人間界が勝利することが出来たのです。」

勇者「ああ、なるほど。先代魔王が聖剣で斬られたのに、どうして糖尿病患うまで長生きしてんのか不思議に思ってたんだけど、しっぱを斬り落とすところまでで止めてたってわけね。」

女神「そういうこと。今、突然ミイラじじいさんが怒り出したのもあなたが聖剣で彼のしっぱを斬りおとしてやるなどと、言い出したからなのですよ!ミイラじじいさんに失礼じゃないですか。きちんと謝りなさい!」

勇者「（、・＃） フツ。やなことだ！！」

女神「えっ？」

勇者はスクツと立ち上がると、ミイラじじいの方に向き直り、カッ
コ良くビシツ人差し指をつきつける！

勇者「だいたいなあ！勇者と女神が、敵である悪魔と仲良く酒飲ん
でる状況からしておかしいんだっつーの！このミイラじじいさえ倒
しとけば、世の中平和になるってことだろうが！魔王ピイチャンは
無能でヤル気がないんだから、放置プレイにしておいても別に構わ
んということだ！！」

女神「ああ、そうか、言われてみればそうですね。（手をぼん）」

ミイラじじい「ぬぬう！！バレてしまったか！！流石は勇者と女神
！！（油汗ダラダラ）」

勇者「相手はヨボヨボのミイラじじい一人、しかも弱点が判りきつ
ていて、最強の武器も我が手にあるッ！確実に勝てる状況の戦いで
あれば、俺様は最高に強いぜッ！！（瞳がキラリーンと光る）」

女神「w（、・）w いやまあ、誰でも普通はそうでしょう
ね。威張りながら宣言することではないと思いますが…。というか、
そこまで恵まれた状況じゃないと戦わないんですね、ミナミン……」

勇者「ふはははは！！！！くらえ、ミイラじじい！！正義の怒りをな

アアアア！！」

早速勇者は手に持っていた、聖剣エクスカリバーを透明なビニールから取り出したのであった！！！！

あのダメ勇者ミナミンが初のヤル気まんまん、マトモにカッコよさげ！？

むしろ何だかやな予感！！

続く。

勇者「とかツッコミ入れてる場合じゃねえっつもの！マジ死ぬ！！このままでは俺様が死ぬううう！！しかもこの居酒屋個室って、バツチリ密室じゃねえか！換気換気ッ！」

勇者ミナミンは、必死で手を伸ばし、居酒屋個室のフスマを開けようとした、その時である！

ミナミンが手をかける寸前に、フスマが勝手にスパーンと開いた！

つば九の店員「お巡りさん、この部屋ですっ！言い争う声がしたのは……うっっ！」

警官「ぐはっ！何だ、この異臭わッ！！まさか、テロっ？」

女神「ゝゝゝ（ＴＴ）ゝゝゝ はわわわわ。ち……違っんですううう！！」

店員「ああっ！見てください、お巡りさん！刃物持ってる人がいますよ！！間違いありません、こいつらテロリストですっ！」

勇者「ゝ（#。Д）ノ 誰がテロリストだッ！俺様たち、世界を守る勇者＆女神だっつーの！」

女神「だから、そのユニット名はいやああああ！！！」

警官「しかも何だ、このじいさんと女性のコスプレのようなカッコー！とりあえず全員、署まで来てもらおうっ！（３人全員に手錠をかける）」

ミイラじじい「(T皿T) にゅおおおおつ。く……くつじょく
く……!」

女神「(ΩΔΩ) 聞いてください、お巡りさんんん! 本当に違
うんですつたらああああ。」

警官「はいはい判った判った。ヨッパライはみんなそう言うんだよ
ネ! 話なら署で聞くからつ。」

店員「あ、先にお会計お願いします。全部で29800円にな
ります。」

勇者「d(ゝω・*)b あ・お金はそのミイラじじいが払うか
ら、よろぴくネっ」

ミイラじじい「(。D。) ギニアアアア! ……踏
んだり蹴ったり——!!! (悶絶叫)」

真面目に世界の命運を賭けた戦いが始まるかと思いきや、アッサリ
と警察にしょっぱかれてしまった3人なのであった!!
よい子のみんなは、居酒屋で悪臭漂う刃物を振り回して暴れてはい
けませんヨ

次回、新たな展開の予感!!

その前に、勇者&女神は警察から出てこられるのか?

続く。

16話「最大最強の敵、現る!!!」

世界の命運を賭け、居酒屋つぼ九で悪魔伯爵ミイラじじいと戦おうとした勇者ミナミンと女神アルテシアだったのだが、店員に警察に通報されてしまい、酔っ払って暴れたバカとして全員逮捕されてしまった！

——警察の留置場に、まとめて放り込まれてしまった3人だったのだが…。

勇者「ンガ〜スピョピョピョピョ……」

女神「ミナミン！ちょっとミナミンってば！もう朝ですよ！起きてくださいー！」

勇者「ぐへへへへ。もう食べられなあ〜い。シノちゃんも、藍子ちゃんも、リンゴちゃんも、みいんな俺のものだァ〜。」

女神「（、×´・｀） またト淫夢ですかっ！第一話と全く同じ展開じゃないですかー！！ええい、もう起きなさいというにー！！」

（ノ*、A´ノ …… ……
どんがらがっしゃん！！！！！！

留置場のベッドから転げ落ちた勇者「ムガ？あれ、アルじゃねえか。

てか、ココどこ？何で俺様たち、牢屋に入ってるの？（キヨロキヨロ）」

女神「ここは警察の留置場ですよ！昨日、私たち、警察に捕まってしまったでしょ！」

勇者「Σ（「Δ」；） えええええっ？何でっ？」

女神「（・Δ・；） 昨日の出来事を、全く覚えてないんですかつ！？」

勇者「え〜と、たしかミイラじじいとビール飲んで〜焼酎飲んで〜日本酒飲んで〜ウイスキー飲んで〜。おっ、思い出した思い出したっ！俺様、その後、ムカついたからミイラじじいを倒そうとしたんだけど、警察に邪魔されたんだった！」

女神「、、、、（ＴＴ）、、、、 世界を救うためではなく、ムカついたからミイラじじいさんを倒すつもりだったんですね。いや、判ってはいましたが…。」

勇者「あれ？そ〜いえば、ミイラじじいがないぞ！奴はどうした？おのれ、一人だけ脱出しやがったのかっ？（嫉妬）」

女神「ミイラじじいさんは、夜中にゲロゲロ吐きだして、救急車で病院の方へ搬送されてしまいましたよ。みんな大騒ぎになってたのに、ミナミンったら、ぐっすり眠りこんで全然起きないんですもの。」

勇者「あの程度の酒で簡単に急性アルコール中毒ってかよ！つゝかさゝ、先代魔王は糖尿病らしいし、現魔王のピイチャンだって二ー

トでぐうたらだつゝ話だし、もしかして悪魔連中って普通に弱くね？この俺様が、わざわざ討伐に出かけなくても、近所の血の気の余つてそんなヤンキー少年を10人ぐらい集めて攻め込めば、魔界制圧できそうな気がしてたまらないんだが。」

女神「い、い、（Ｔ　Ｔ）い、い、近所のヤンキー少年軍団に救われるような世界っていったい……！！」

勇者「なにおう！ヤンキー少年10人を侮ってはいかん！！奴らは若い分だけ命知らずなのだ！装備も充実している！武器：角材・野球のボール・釘バット等、防具：お父さん（建築作業員）のヘルメット・じいちゃん（農家）の農作業用ゴム長靴・盾は台所からチョッぱねてきた鍋のフタ……！！これが10人もいるんだぞ！！おまけに全員、目つきが悪くマユゲもないのだ！うをゝ何て強そうな集団なんだろうっ！！！！これで世界は安泰だああ！！（両手の拳を、天に突き上げて叫ぶ。）」

女神「……もう、あなたの妄想暴走には、どこからつつこめばいいのか判りません……。酒は抜けてるはずなのに、よくそんなこと思いつけますね……。　（滝涙）」

勇者「おっ。ついでに今気付いたんだが、俺様のヌカミソードがないではないか！」

女神「ついでって！一番大事なことでしょっ！聖剣エ・ク・ス・力・リ・バアア……（名前を強調）は、刃物厳禁ということで、警察に没収されてしまいましたよ。はうとうう。事情を説明して、返していただかなくては……。」

勇者「何より、ここからまず出ないことには、魔王討伐も何もあつ

たもんじゃね〜な。さ〜て、どうしたもんだか……」

その時である！

鉄格子前の廊下奥側から、ズシーン……ズシーン……という、重低音が響いてきた。

その音は、だんだんこちらに近づいてくるようだが……？

勇者「i l — l i (φ Δ φ ;) i l — l i こ……この音わ、もしやツ？」

女神「何かしら？誰かの足音のようですが……。」

勇者「(: . . ; . ; Δ ; . ; . :) し……しまったあアアア！
！奴がつー！奴が来てしまったあああつー！！（青ざめながら、超ガクブル）」

女神「え？誰？お知り合いの方ですか？」

勇者「奴は俺様の、最大最強の敵だつー！！」

女神「ええっ？最大最強の敵っ？」

勇者「 . ; Δ) > うぎゃああああー！！牢屋内にいたのでは逃げ切れん——！！タ〜スケテエエエエー！！」

あの図太い神経の勇者ミナミンをここまで怯えさせる、最強最大の

敵とは一体誰なのか？

ミイラじじいの病状は？

聖剣エクスカリバーの行方は？

勇者&女神は留置場から出られるのか？

様々な謎を残しつつ、物語は新たな局面へ突入するッ！！

続く。

17話「勇者、戦闘不能!!」

留置場の鉄格子の中にて、朝の平和(?)なひとときを味わっていた勇者&女神だったのだが、それを打ち崩すかのように、廊下の奥からこちらへと近づいてくる怪音!!

ズシーン……ズシーン……

勇者「ΣΣ (一一一、□、一一一; ;) ギャアアア!!!
間違いねええええ!!! 奴の足音じゃああああ!!! 奴が!!! 奴が近づいてくるううう!!! 俺様、殺されるううう!!! (往生際悪く留置場の天窓にモガモガとよじ登って、逃げようと試みては、失敗してずり落ちる。)」

女神「Σ (´・ω・111) ええっ? 何をそんなに怯えているんですか、ミナミン!」

ズシーン……ズシーン……

……ズ・シーン。

鈍く響き渡っていた足音は、勇者&女神の牢屋のちょうどまん前で止まる。

果たして!!

鉄格子の向こうには、まるで山のフドウのようなエプロン姿の巨漢

が、額に青筋を10個ぐらい浮かべて、すごい形相でミナミンを見下ろしていた!!!!

勇者「Σ（「口 111」） ぎいやあああああ!!! か……母ちゃんんんんんん!!!」

母親「ミナミンンンツツ!!! あんた、何やってんだいいい!! 酒飲んで、居酒屋で暴れて警察にしょっぴかれるとは何ごとじゃああああッ!!!!」（怒号が、警察署の建物全体を震度7級で揺らす。）

女神「Σ（――。d」） えええええっ? ミナミンの恐れていた最強の敵って、ミナミンのお母様っ?」

母親「身元受人になってくれって、朝、警察からうちに電話が来た時、あたしゃ恥ずかしくて口から火を吹くところだったよ!」

勇者「恥ずかしくて顔から火が噴き出そうだったってんなら判るけど、口から火を吹くのは変だろっ!!! キングギドラかよ!!!」

母親「人の言葉尻つかまえて、ツッコミ入れられる立場だと思ってるのかいいいい!!!!」（怒りのあまり両目がギラツチヨリーンと光りだし、地獄の閻魔の如く、口から炎がベロベロと吹き出てる。）

勇者「比喻じゃなくて、本当に火を吹いてやがるよ!!! キングギドラそのものだよ!!! それでも人間か!!!!」（涙目になりながら、母親がヒト科のホモサピエンスであることに対して猛抗議。）

母親「問・答・無・用——！！！！そこになおれええい、ミナミン——！！！！！！」

ミナミンの母ちゃんは、ポパイのような豪腕を鉄格子にかけると、
フンヌツという掛け声とともに、左右に引く。

鋼鉄で出来ていたはずの棒は、まるで飴細工のようにぐんにやりと、
いともあっさりひん曲がってしまう！

ミナミンの母ちゃん、恐るべし！！！！！！

母親「くらえ！！息子矯正拳！（要するに息子におしおきするため
だけに、自力で適当に拳法を開発。）超必殺奥義！！！！絶・天狼
無双飛翔薔薇醬油転生憂鬱昇龍覇アアアアアア——！！！！」

やたら画数が多くて読む気の失せるような漢字ばかりの必殺技名を
叫ぶと、母ちゃんは拳をくりだした！！

衝撃波が留置場のコンクリートの床を爆音と共に破壊しながら突き
進み、ミナミンを直撃！！

ミナミンは見事に壁にめりこみ、一撃でHPが0となって戦闘不能
と化した！！！！

女神アルテシアは、掃除機が怖くて部屋の隅っこまで追い詰められ
てしまった子猫ちゃんのようにプルプルと震え、硬直したままだ。

そこに、激しい轟音に驚いた警察官が、様子を見にすっ飛んできた。

警官「ちょっと！どうしたんですか……うつつ？何だ、この手榴弾
が10発ぐらい炸裂したような有様わっ？もしかしてテロツ？」

母親「ああ、おまわりさん。すみません、うちの息子をご迷惑をおかけいたしました……。」（深々と頭を下げる）

警官「いや……。あの……。息子さんはたいした迷惑ではないんですが、それよりも、この留置場の有様は一体……。」

母親「ああ、これですか？タオヤメ（漢字では『手弱女』と書く。）の私がちよっぴり手をかけただけで、こんなふうになってしまったんです。建物や鉄格子が、老朽化していたんじゃないでしょうか？（いけしゃあしゃあ）」

警官「あ……。そ……。そうなんですか……。お……。教えてくださって、感謝いたします……。す……。（怖いので反論できない）」

母親「いえいえ、警察に協力するのは、善良なる市民の努めですから。それでは、これにて失礼いたします。息子を連れて帰りますので、息子が持っていたはずの剣も返してください。」

警官「いえ……。あれは凶器にあたりますから、お返しするわけには……。」

母親「返していただけるんでっ・すっ・よっ・ねっ？（母ちゃんの背後のオーラがゴゴゴゴゴ……。という音と共に、仁王の姿をかたどってゆく。）」

警官「あ……。ハイ……。勿論ですとも。おっ、お返しいたしますですッー！（敬礼）」

母親「さーて。話も済んだところで、ホラ、さつさと帰るよ！ミナミン！！（壁に埋まったままのミナミンをえぐりだし、首ねっこを持ってひきずってゆく。）ほら、お隣のおじょうちゃんも、一緒においで。」

女神「（：：：。；Δ；。；：。） ははははははいいいいいいい。（従属）」

こうしてミナミンの母ちゃんの功績（？）により、無事……いや……全然無事じゃないか……どうにかこうにか牢屋を脱出した、勇者ミナミンと女神アルテシア。

母ちゃんが無理強いした警察のご好意により、聖剣エクスカリバーも返却してもらえて、一件落着

留置場を脱出した後、新たな二人の旅は始まる……のか？
そもそもミナミンは生きているのか？

ある意味、魔王にやられるとかよりも、勇者&女神は大ピンチのよ
うな気がするぞ！！

続く。

18話「まんじゅう怖い。母ちゃんもつと怖い。」

ミナミンの母ちゃん（似てる有名人：山のフドウ）の脅迫……じやなかった、協力により、無事留置場を脱出し、聖剣又カミソード……じゃなかった、エクスカリバーも取り戻せた、勇者ミナミンと女神アルテシア。

彼らの次なる旅の目的地はどこだっ？

それはさておき、勇者ミナミンは母ちゃんの息子矯正必殺拳の超大技をくらい、気絶中である。

母ちゃんは軽々とミナミンを肩にかつぎ、悠然と街をゆくのだった。その後ろを、チヨコチヨコと小走りで、女神アルテシアが続く。

母親「いやゝ、今日もいい天気だねえ。街のみんなも親切に、か弱い私が息子をついでいるのに気をつかって、道をあけてくれているよ。」

女神「ゝゝゝ、（ＴＴ）ゝゝゝ、はううつゝ。て、いうか、なんとなくみんな怖がって目を逸らして避けていつているようなゝ。モーゼになつた気分ですうゝ。」

母親「ところで、アルテシアちゃんだっけ？うちのバカ息子がすっかりお世話になつちやつたみたいだねえ。」

女神「いえいえ、とんでもありません！ミナミンには、こちらこそお世話になっております。魔王を倒し、世界を平和に導くために、協力してもらっておりますので。」

母親「へえ、この子がそんな立派なことを！ミナミンは一体、あんなに何の協力をしたんだい？」

女神「ええと……とりあえず初日の昨日は、ミナミンが失くした聖剣エクスカリバーと一緒に探して、それから見つけたエクスカリバーはすでに又カミソ漬けになってたので一緒に洗って、魔界の四大公爵であるミイラじいさんと三人で飲み会をやって、で、最後には乱闘騒ぎとなりまして、全員仲良く警察にしょっぱかれました……。」

母親「（溜息）協力はしているけど、役にはたってないみたいだね……。」

女神「はい……。今、昨日の出来事を口に出してみて、お母様とまったく同じツッコミで、最後を締めようとしていました……。うつつ。（涙目でうなだれ）」

母親「（；・D・）すまないねえ。ホント、うちの息子ときたら出来が悪くって。ヘタレなところなんか、父ちゃんにそっくりでさあ。」

女神「そういえば、ミナミンのお父様はどうなさっているのですか？」

母親「ああ、今、まんじゅう屋の店番やってるよ。」

女神「あら、ミナミンのご実家はまんじゅう屋さんなんですな。」

母親「勇者の家系がまんじゅう屋っていうのも変な話んだけどさ。でも勇者だけでは平時に食べていけないからね。」

女神「（＊´ω、＊）　いいえ、立派なお仕事だと思います！私、おまんじゅう大好きです！」

母親「そうかいそうかい。（上機嫌）あんだ、いい娘だねえ。今度、うちに来た時にたらふく食べさせてあげるよ。」

女神「。　。・　＋　：　ゞ　（＊・　・　）　シ　：　：　。　＋　。　ほんとですかっ？」

母親「一番人気は、『勇者まんじゅう』さ！伝説の勇者の血筋をひいた父ちゃんが作る、勇者まんじゅうっていう触れ込みなんだ。」

女神「（＊´ω、＊）　まあ、抜け目なく、勇者家系であることをおいに利用されているんですね。お見事ですわ。」

母親「本当はまんじゅう焼いてるのが私で、店番はうちの人なんだけどね。ほんと、うちの人ときたらミナミンと一緒にヘタレなもんだから、満足にまんじゅうひとつ焼けやしない！ところで見たところ、さっき魔界の誰かと、三人で飲んだって言ってなかったかい？警察にはあんたたち2人しかいなかったみたいけど？」

女神「あ、ミイラじじいさんは留置場に入った後、急性アルコール中毒になって救急車で病院へ運ばれてしまったのです。」

母親「Σ（；　・　・　、　Δ　・　´　）　何だってツ？そいつはいけない！お見舞いに行つて、母親としてうちの息子の非礼を詫びないと！」

女神「Σ（・　□　・　；　）　はっ。そうですよねっ。私もミイラじじいさんに、謝りたいですっ！」

母親「多分、警察署から一番近い総合病院に運ばれたのだろうから、そこに行ってみようか。けど、手ぶらつてのも何だね。うちのまんじゅうでも持っていてあげようか。」

女神「それは素晴らしい考えです！勇者まんじゅうなんて、きっと魔界では手に入らないだろうから、ミイラじじいさんもきっと喜んでくださいますわ！」

思わずぼそりと呟く勇者「……………何で魔界の四大伯爵に見舞いに行った拳句、よりにもよって『勇者まんじゅう』持ってくんだよ、お前らオカシイっつの……………っ！か意気投合してんじゃねえよ……………」

母親「…………ん？アルテシアちゃん、今、何か言ったかい？」

女神「いいえ、私は何も。（ふるふると首を横に振る）」

母親「おかしいねえ。確かに何か、聞こえた気がしたんだけど。」

女神「ミナミンも相変わらず、ぐったり気絶したまんまですしねえ。」

母親「お、公園があるね。ミナミンを担いだままじゃ重たいから、私だけ、ひとつ走り店に戻って、まんじゅうを取ってくるよ。アルテシアちゃん、ミナミンとエクスカリバーを公園においておくから、ちょっと見ててもらえるかい？」

女神「（*^ ^）／ はいっ。わかりましたあ。」

母親「アルテシアちゃんの分の、まんじゅうも持ってきてあげるか

らね!」

女神「、(< >) ノ わあ、ホントですか??わざわざ有難うございますっ!」

母ちゃんは、肩に担いでいたミナミンを公園のベンチの上に降ろすと、凄い振動と爆煙をあげながら、自宅に向かって走り出したのであった。

その後ろ姿は、まるで怒りに我を忘れて突撃する、王蟲のようであったという……。

勇者「(突然ガバツと起き上がる) ヨッシャアアアア! 今だ――
――!! 逃げるぞ、アル――!!!! (叫ぶや否や、又カミソードをひっ掴み、脱兎の如く走り出す)」

女神「Σ (□ 111) えええええッ? 起きてたんですか、ミナミン――?! 逃げるってどこへ? っていうか、私のおまんじゅうはああああ???」

母ちゃんの間をついて、脱出に成功した勇者ミナミン!

だがしかし、一体どこへ逃げるつもりなのであるのか?

母の魔の手は、世界の裏側まで追いかけてくるに違いない!!

どうする、ミナミン! 逃げ切れるのか、ミナミン!

そして女神アルテシアは『勇者まんじゅう』を食べられるのか?

続く。

19話「勇者、ついにヤル気を出すハメになる！」

家へまんじゅうを取りに行った母ちゃんの間について、母ちゃんの魔の手から逃げ出した勇者ミナミン！

ミナミンを追う、女神アルテシア。

二人はこの後、一体どうするつもりなのか？

勇者「ハアハアハア……ここまで逃げて来れば、母ちゃんも追ってこないだろう！」

女神「待ってください！ミナミン！はあはあ……やっと追いついたわ。まったくもう、ミナミンったら！急に走り出すんですもの！私、お母さん手作りのおまんじゅうを食べ損ねてしまったじゃないですか。（ぶんぶん）」

勇者「まんじゅうぐらい、俺様がそこらへんのコンビニで買ってやるわい！……うゝむ。母ちゃんのアマリの怖ろしさに、夢中で逃げてきてしまったが、ところでココはどこなのだ？（キョロキョロ）」

女神「さきほどいた場所とは別の公園のようですねえ。」

勇者「ここは、でかい建物に隣接しているみたいだな。周囲を白い塀で囲まれているし、もしかしたら、ここは公園ではなく、あの建物の庭なのかも知れん。」

女神「他にも人はいらっしやるようですし、出入りは自由みたいです。芝生も手入れされているし、色々なお花も咲いているし、綺

麗なところです。あの建物は何かの公共施設なのでしょうか？」

勇者「あまり来たことのない場所だからな。俺様もここいらへんの地理には詳しくないのでよくわからん。建物の正面入り口に回れば看板ぐらいあるだろう。後で行ってみよう。」

女神「あ、あそこにベンチがあるわ。一休みしましょうよ、ミナミン。」

ミナミンとアルテシアは、公園の真ん中にある、白いベンチに腰掛けた。
ふうやれやれと、一息つく二人。

女神「ところで、これから先、どうするのですか？ミナミン。ミイラじいさんのところにも、お見舞いに行かなくちゃならないし。」

勇者「敵のお見舞いは行かんくていいのっ！　うゝむ。これからどうするか、か。何か、しばらく実家には帰れない雰囲気だしな。」
（腕組みして、しばらく考え込む）

女神「考えるまでもないことです！あなたは勇者なんですから、魔王ピイチャンを聖剣エクスカリバーで倒して、世界を平和に導けばよいだけのこと。」

勇者「そうだな。魔王を倒しに行くとするか。」

女神「（、×´；）　まったくもう！ミナミンったら、どうしてそんなにヤル気がないんですか。そんなだから貴方は、いつまでたっ

ても……………え、？今、魔王を倒しに行くって言いました？」

勇者「おう。俺様、これから魔王を倒しに行くぜ。」

女神「Σ（「□」１１１） どうしてっ？何かあったんですか、ミナミン！……………はっ！もしか先ほどお母様にくらった拳の衝撃で、頭をぶつけてしまったのでわ……………！きゅ……………救急車を呼ばないとう！熱測りましょう、熱！（ミナミンのおでこに手のひらを当てる）」

勇者「（「△」？） あのなあ。熱なんかないっつーの。俺様、至ってマトモじゃい。魔王を倒せって言ったのはお前だろうが。」

女神「……………いや、まあ、そうなんですけども。でも、ミナミン、どうしてそんな、いきなり勇者らしさに目覚めちゃったんですか？（うたぐり深い目）」

勇者「目覚めたわけじゃねえよ。魔王を倒さないことには、このままだと俺様、家にも帰れねえだろうが。つーか、ミイラじいの話から推測するに、魔王ピイちゃんって、すんげえ弱そうじゃね？だったら、俺様的にはサクツと魔王を倒して、とっとと最終回を迎えたいわけよ。」

女神「ははあ……………なるほど。」

勇者「ところでさ。……………アル。」

女神「はい。何でしょう？」

勇者「さっきから気になってたんだが、俺様たちの真正面にいる男、

見えるか？（指をさす）安っぽい黒のジャージ上下を着て、髪がぼさぼさで、頭に角、ケツにしっぽの生えてる、いかにもヲタクっぽい、モテなさそうな奴がいるだろ。」

女神「ああ、あの白い壁際にいる方ですか？見えますよ。私、視力はとても良いのです。あの方、壁にでかかと、スプレーで何か書いていらつしやるみたいです。何て書いてるのかしら？ええと……『夜露死苦 メカドック』ですって。」

勇者「……アル。」

女神「はい。何でしょう？」

勇者「俺様、その、『夜露死苦 メカドック』っていう単語に、著し……く聞き覚えがあるんだが、何話目に出てきたか覚えてるか？」

女神「ええと……確か、『11話 ぐうたら魔王』の回ですね。」

「抜粋」

>勇者「アル、神界は何か魔王ピイチャンにテロられたわけ？」

>女神「はい。神の城の外壁に『夜露死苦メカドック』と、スプレーでデカデカと落書きをされました。」

>勇者「今更、誰も知らんぞ、『よろしくメカドック』なんて古い番組……！」

……「この部分じゃないでしょうか？」

勇者「……アル。」

女神「はい。何でしょう？」

勇者「臭うぞ。しっかりと鼻つまんでろ。」

女神「了解しました。」

勇者は透明なビニール袋から、ジャキコーン！！！と、聖剣又カミソードを抜き放った！！！！

勇者「εε|||≡、(#、D)(/) てんめええええええ！！！！コラ、ピイチャン——！！！！どのツラ下げて、ここで会ったが百・年・目エエ——！！！！ブツ殺してやるああああアア——！！！！どうおりやああああああ！！！！！！」

魔王「Σ(□_||_) ギャアアアア——その剣、もしかして聖剣エクスカリバーツ？ギャヒイイイ——！！！！勇者だあああああ——！！！！（スプレー缶放り出して、逃げ出す）」

勇者「逃げてんじゃねえぞ、ゴルアアア——！待ちやがれ、最・終・
回——！！！！」

ギャグじゃないと出来ないような、いきなりの鬼展開（笑）により、魔王ピイチャンとあっさりエンカウトした勇者ミナミン——！！！！魔王を倒して、任務を遂行し、勇者はおうちへ帰ることが出来るのか？

最終回は近いのか？
それとも何かの罠か？

続く。

20話「爆走!!!疾走!!!三つ巴かけっこ大会!!!」

今回、実況アナウンスは全て、千葉繁さん（無駄に血管の切れそうな、裏声ハイテンション全開モード）の声でお読みいただければ幸いです

チャララチャラチャラ♪（雲に乗って、銀河を駆け巡る、
竜虎の画像が一瞬流れる）

つ……
ついにイイイイ！！！！！！

平和な公園の白い壁に、『夜露死苦メカドック』というハレンチ（？）な落書きをしている、魔王パイチャンを発見した、勇者ミナミンんんんん！！！！（ドッギアアアン！！！！）

勇者は聖剣又カミソードを透明なビニール袋から解き放ち、魔王を追いかけるウウウー！！！！（ズッキュウウンー！！！！）

北斗の宿命（何それ）は、あ・誰にイイイイ微笑むのかアアアア
！！！！（ズガシャアアアン！！！！）

戦いの火蓋は、今！！！斬つて落とされたアアアア！！！！（ド
ンガラガツシャアアン！！！！）

勇者「εε||||||≡、(#、D)っ」待アアア
ちやあああがれエエエい!!魔王ピイチャンめえええええ!!
!!!(悪鬼の形相で、追いかける)」

魔王「εεε（ド）ギヤアアアア！！刃物持った変態が追いかけてくるっすううう！！タスケテええええ！！」（命がけで逃げる被害者）」

勇者「山（。∩山） テメエコラ、正義の剣を振りかざす勇者様を、刃物キ。ガイ変態扱いするとは何事じゃあああ！！！」

ちよつと離れた所で、ぼんやりと二人を傍観している女神「ミナミンが、正義の剣を振りかざす勇者様か、刃物キ。ガイ変態かって聞かれたら、絶対後者の表現の方が適切だと思うけどなあ……。」

白い壁に取り囲まれた公園内を、ぐるぐると駆け回る勇者ミナミンと魔王ピイちゃんんんん！！！！

んだどもストコドッコイ、両者とも運動不足丸出しの鈍足だったため、うっかり均衡がとれていて、その距離は縮まりもしなければ広がりもしないイイイツ！！！！

平和な追いかっこは、何の進展もないまま、5分が経過したアアア！！！！

そして、根性のねー二人の息がそろそろあがり始める頃オオオ！！！！

公園内に突如、異変が起こったのであるウウウ！！！！

母親「くおらアアアアア————！！！！ミiiiiナあああミiiii
iiiiんんんんんん！！！！（ばしゅるるる……フゴウウウウ
……闘気の入り混じった、濃い鼻息音。）」

勇者「Σ（∩□∪∪∪） ギャアアアアア！！！！か……母ちゃん
んんんんん？？？見つかったアアアアア！！！！！！」

ミナミンが大気を震撼させるような怒号の先に目を向けるとおおお

おお！！！！

現れたのは、新手のスタンド使い……じゃなくて、山のフドウチツクな母ちゃんだったアアア——！！！！

鬼神の如き形相を浮かべ、ドドメ色の魔闘気を、毛穴という毛穴から噴き上げながら、公園の入り口に立っているウウウウ！！！！

背景には、『ゴゴゴゴゴ……』とかいう、太筆でヤケクソ書きしたような文字が浮かんでいたアアアア！！！！

母ちゃんの鼻息だけで、公園の花壇の花や樹木が全て、なぎ倒されてゆくウウウウ！！！！

そして、風の谷を襲う王蟲の群の如く、轟音と爆煙と共に、母ちゃんがミナミンに向かって突撃してきたアアアア！！！！

勇者「（＊、ω、＊）……ウフフ。ホラ、怖くない……。……つて

！！いやいや、しつかりしろ、俺様！！冷静にナウシカごっこ（自己暗示気味）してる場合じゃないから！！だいたいそれ、テトを手なづける場面だから！！あまりの恐怖に思考停止して、自分でボケて、自分でツツコミ入れて、しかも滑つちまったよ！！ぐぎゃああああ！！！！積み荷を燃やしてええええ！！もとい、母ちゃんを燃やしてえええええ！！！！殿下！！（誰？）巨神兵を！！巨神兵を呼んでくださいませええええ！！！！（心のLRボタンを同時に押し。みなみんは にげだした）」

魔王「Σ（□、１１１）ギヤアアア！！！！なんかいきなり、

勇者がスピードアップしてきたっスウウウウ！！！！」

勇者「待て魔王ピイチャン——！！！！それから助けて、殿下アア

ア——！！！！（だから殿下って誰）」

母親「オラオラオラオラアアア！！！！無駄無駄無駄無駄アアアア

ア！！！（BGM：王蟲が爆走してくる時の音楽）

公園を輪になつてぐるぐると走り回る3人を、中心位置で温かく見守る女神（かけっこ不参加）「まあ、お母様ったら、まんじゅうの箱を2つ持っていていらっしゃるわ。ひとつはお見舞い用で、もうひとつはきつと私の分ですね。嬉し♪あら、そこに自動販売機があるわ。ちょうど良かった。お茶買ってこよっと！」

——突然だがっ！！！！

人間が普段使用している能力は、全体の30%だというツツツ！！！！あまりもの恐怖に、勇者身ナミの眠っていた70%の力やら、いきなり目覚めたアアア！！

ピッカ——*:.。 .:.+. . (〇* 。) 〇 。 + . .
。 .:.*
。

勇者「*:.。 .:.+. . (〇*) ノ 。 + . . *
卍・解ツツ！！！！（↑？） 解き放て、俺様の燃える小宇宙！！！！俺様ターボ・オン！！！！（ピッカアア）どおおおおりやああああッツ——！！！！」

魔王「Σ (〇 1 1 1) うわあああつ！！！！勇者がまたスピードアップしっすううう！！！！……ぜえぜえぜえ……も……も……うダメっス、追いつかれるっすううう——…………
………って、あり？」

スピードアップしたミナミンは、なんと、ついに魔王を追い越した

のであるウウウ！！！
やったぞミナミン、凄いぞミナミン、それでこそ勇者だミナミン
んん！！！

勇者「、（。D）ノ ヨッシャアア！！やったぜ俺様！！魔王に
勝ったぞ！！（かけっこで）……って、ダメじゃん！！意味ねーよ
！！何やってんの、俺様！！ぎよもおおお！！！公園内をぐるぐ
る走り回ってたもんだから、このままでは母ちゃんにも、追いつい
てしまいそうだアアアア！！！！」

全然空気読んでない女神「♪（*^ ^）ノ～ みなさあん！全
員分のお茶を買ってきましたよ！おまんじゅうもあることですし、
ミナミンも、お母様も、魔王さんもそろそろ一休みませうん？」

母親「（急ブレーキ）（〃^ ^〃） あら、アルテシアちゃん、
気がきくこと！ちようど喉が渴いてきてたんだよ。」

魔王「（停止）。+。（・・）。+。 え？俺の分もあるんっ
スか？あざーす！いただくっス！」

勇者「凹。パタッ………………。 （展開の早さと適当さについてい
けず、おまけに筋肉痛と疲労で、ばったりと倒れこんだまま動けな
い）」

女神アルテシアの天然の陰謀（笑）により、結局、仲良く全員でお
茶することになった、御一行！！！！

世界の運命はどうなってしまうのか？
勇者の筋肉痛は大丈夫なのか？

続く。

21話「世界の命運を賭けた、まんじゅう座談会」

メチャクチャな諸事情により、ぽかぽか陽気のお昼の公園のと真ん中で、仲良くまんじゅうお茶タイムをすることになった、勇者ミナミン、女神アルテシア、魔王ピイチャン、そしてミナミンの母ちゃん。

これでいいのか、世界!!!

こんなんで大丈夫なのか、世界!!!

っ！か、もうとつくに平和なんじゃないのか、世界!!!

女神「もぐもぐ。＊。＊。＊。＊（＊、A、＊）はわわわ。この『勇者まんじゅう』すんごい美味しいですう。あんの風味が良くって、甘さ加減も絶妙！生地もしっかりもちもち。」

魔王「ほんとつスねー！味も最高だけど、このエクスカリバーに見立てたバナナまんじゅうみたいなのが、また愉快でいいっすよ！」

母親「そうかいそうかい！（上機嫌）ほら、まだまだあるからいっぱいお食べ！」

勇者「（、x、；）……………あのよお……………ちよつといっか……………（すんごい不満げ）」

女神「はい、なんでしょう？ほら、ミナミンもひとつ食べるといいですよ。」

勇者「俺様はいらん！食い飽きて、もう見たくもねえっつーの！……………じゃなくてっ！！！おかしくねえ？この団欒の図！！勇者（俺様）

と、魔王（めっちゃ敵）と、うちの母ちゃん（ラスボス）と、女神（素ボケで貧乳）で、仲良く『勇者まんじゅう』食ってる構図って、絶対変だっつのー！！」

女神「（＞Ａ＜）ノ 私の（素ボケで貧乳）っていう注釈は何ですか？私だけ、内容的に他の方と違うじゃないですかっ！」

魔王「勇者さん、俺よりも、お母さんがラスボスなんスね…。なんか忘れ去られた気分っス…。」

女神「元気を出してください、魔王さん。頑張ればきっと、いつか報われますよ。」

勇者「（Ｌ、口、；）Ｌ アル、魔王を励ますなツ！だいたい報われるって何？このヘナチヨコ貧弱魔王が、どんなに頑張ろうともうちの母ちゃん（山のフドウ）に勝てるわけがないだろうがー！！うちの母ちゃんをタイマンで倒せるのは、シンジ君のお母さん（エヴァンゲリオン初号機とも言っ）ぐらいだっつのー！！あ——も——！！お前らと話していると、あまりにもズレてて、頭が変になりそーだー！！常識人、俺様だけー！！最早、この話の良心は俺様だけー！！」

女神「ミナミンに常識を説かれてしまっただなんて…！屈辱…！！（涙目）」

母親「（魔王の方を見て）おや、あんたどこの子なのかと思ったら、魔王さんちの子かい。」

魔王「魔王さんちの子というよりかは、魔王そのものっス。うち、代々魔王の家系なんス。うちの親父が糖尿病になって隠居したんっ

ス。俺、一人息子だったんで、継ぎたくもないのに跡をつがされてしまったっス。」

勇者「俺だって勇者継ぎたくなかったよ！何だよ、母ちゃん、コイツが魔王なの知らないで、俺様ごと追いかけてたのかよ！」

母親「というか、わたしやアンタしか追いかけてなかったけど。」

勇者「大体、何で俺様のいる場所が判ったんだよ！ストーカー？ねえ、ストーカー？それとも、ミナミン ナビでも搭載してんのツ？」

女神「きつと愛の力でミナミンのいる位置を探し出すことが出来たんですよ。ね、お母様。（ミナミンの母ちゃんを、すっかり尊敬モード）」

母親「いや、見舞い用のまんじゅうを取りに行って戻ってきてみたら、二人とも待たせておいた場所からいなくなっちゃってたろ。仕方なく一人で病院に行こうとしたのさ。そしたら、あんたたちが病院の敷地にいたんだよ。」

勇者「つまり、今いるココって、タダの公園じゃなくて……」

女神「つまり、さつきから気になっていた、すぐそこにある大きな白い建物って……」

魔王「あ・それ病院っス。この公園も、病院の敷地っス。俺、今朝、警察から連絡きて、ライーミの身元を病院まで引き取りに来て欲しいっていつから、人間界に来たんス。」

女神「見舞いをサボッて、お母様から逃げてきた先が、まんまと本

来の目的地だったということですね。どおりで。いきなり魔王さんと出会った理由も、納得できました。」

勇者「むが。ふ……不覚……。 (うなだれ)」

魔王「あれ？もしかして、皆さん、ライーミの見舞いに来てくれたんスか？事情は警察から聞いたんスけど、なんか、年甲斐もなく、若い人たちと一緒にになって飲みすぎて倒れたとか何とか…。その若い人たちってのが、勇者さんと女神さんだったんスね。いやゝすいません、うちのじいやが、迷惑かけてしまったみたいで…。 (ぺこぺこ)」

女神「いえいえ、こちらこそ、お年を召した方に、加減もせずに飲ませてしまつて…。私たちが悪いのです。申し訳ございません。 (こちらも、ぺこぺこ)」

勇者「(「口」)」 だゝからゝ!!! 敵同士で、謝り合戦すんなつつの!!! てか、敵同士っていうので思い出したぞ! ! ピイチャン!!! てめえのしつぽさえ斬りおとせば、魔王は魔力を失い、世界は平和になって、このくだらねー話も天晴れ最終回つっ一寸法じゃ!!! そこになおれい!!! (又カミソードの柄に手をかける)」

魔王「(「:」) ; D ; ; :) いやいやいやいや、ちょっと待ってくださいッス! 多分、俺を倒しても、エンディングロールは流れてこないッス!!!」

勇者「(「D」?) 何でじゃいッ?」

魔王「勇者さんと女神さんの目的って、正確に言つと、俺を倒すこ

とじゃなくて、世界を平和に導くことでしょ？」

女神「ええ、まあ、言われてみればその通りですわね。」

勇者「フッ……違うな！俺様の目的は、働きもせず、毎日ダラダラと面白く過ごすために、どうでもいいから、さっさとこの話を終わらせ………げふウッ！！！（母ちゃんの強烈な一撃を後頭部にくらい、地面にめりこむ）」

魔王「だったら、やっぱり俺のしつぽを斬りおとしても、最終回にはならないっす。」

女神「まあ、どうしてですか？」

魔王「俺を倒しても世界は平和にならないからっす。何故なのかは、これから説明するっす。」

なんだか、いきなり最終回が遠のいてしまったっばい！

魔王本人が語る、魔王を倒しても世界が平和にならない理由とは、一体何なのか？

まんじゅう座談会は、まだまだ終わらない！

続く。

22話「迷惑なアホ、現る!!!」

病院の敷地内にある公園で、真昼間から繰り広げられる、世界の命運をかけた勇者ミナミン・魔王ピイチャン・女神アルテシア・ミナミンの母ちゃんの巨頭(?)会談!!

お茶請けの、母ちゃん特製：勇者まんじゅうは、とっても美味しいらしい!!

そんな中、神妙な口調で魔王は語る…。

「俺を倒しても、世界は平和にならないっス……」と……。

女神「(*´ω`*) はゝ。この勇者まんじゅう本当に美味しいゝゝゝもうひとつもらってもいいですか？」

勇者「おい、魔王！普通、魔王を倒したらRPGは最終回だろうが。一体どういうことなんだよ！」

母親「ああ、いいよ、いくらでもお食べ、アルテシアちゃん。何だったら、またうちからいっぱい持ってきてあげるからね！」

魔王「ええ、今からそれを説明するっス。それを説明する前に、ひとつ確認しておきたいことがあるんスけど……」

女神「えっ？本当ですか？嬉しいゝ！あ、でも太っちゃうゝ！でも食べたあい！」

勇者「確認しておきたいこと？何じゃい。ちなみに俺様のスリーサイズは秘密だからな！」

母親「アルテシアちゃんのどこが太ってるんだい！細すぎるぐらいだよ！女の子はちょっとふつくらしているぐらいでちょうどいいんだよ。」

魔王「いや、別に知りたくないっす。俺、ホモじゃないんで。というか、生身の女にもあまり興味ないなあ。」

女神「（´・ω・｀）私、けっこうお腹は出てますよ。でも胸はないんです…。（しょんぼり）」

勇者「Σ（「□」１１１）はあッ？何でっ？……まさか貴様、見た目の通り、二次元の萌えキャラにしか、興味ない系だなっ？」

母親「アルテシアちゃんぐらいでちょうどいいって。あたしみたいな巨乳も、なかなか苦労するんだよ。しまむらに、あたしサイズのブラジャーがおいてなくてさあ…。」

魔王「…：*：…（〃〃）…：*：… エヘヘ 実はそうなんス！あ、俺、一途なタチなんで、マギまどとか、初音とか全然興味ないんす。今でも、ときメモの藤崎詩織一筋なんスよね！で、聞いてくださいっす、俺、同人やってて……。」

勇者「（空になったお茶のペットボトルをバンバン打ちつけながら）いやいやいやいや！！！！ちょっと待てい、貴様ら！！ピイチヤンの同人履歴も藤崎愛も、アルの貧乳伝説も腹の贅肉具合も、全部興味ないっつの！！完全にまんじゅうダラベリ大会になっちゃってんよー！！」

魔王「ダラベリってどういう意味っスか？」

勇者「だらだらしながら、ダベってるだけの状態だ！！あのな、俺様はさつさと最終回にしたいつつってんだろぅが！！世界の命運の話をしろよ！！それから、母ちゃんは巨乳なんじゃなくて、大胸筋が発達してるだけですから！フドウサイズのブラなんか仕入れたら需要がなくて、しまむら潰れてまうわ！！………げふっ！
！（母ちゃんの肘鉄を脳天にくらい、地面にめりこむ）」

女神「Σ（；・・、Δ・ゝ） はっ！ミナミンの言う通りです！おまんじゅうの美味しさに惑わされて、世界の命運のことをスポーンと忘れていましたっ！話を元に戻さなくては！！」

魔王「世界の命運、まんじゅう以下っスか。」

母親「ピーチャン………だつたっけ？魔王であるあんたを倒しても、世界が平和にならないって一体どういことなんだい？」

顔面泥まみれの勇者「そういや最初の方で、その説明をする前に確認したいことがあるって言ってたな。何のことだ？」

魔王「勇者さんと、女神さんは、うちのじいや……ライーミと酒と一緒に飲んだんですよね？」

女神「（*ゝωゝ*） はい。有難いことに、ミイラじいさんに奢っていただきました。」

魔王「ライーミ、自分の肩書き名乗ってなかったっスか？」

勇者「ああ、そういえばあのよばよばジジイ、偉そうに何か言ってたな。『魔界の四大悪魔伯爵』とか何とか……。」

女神「（手をぼん）（；。0。）……………あ。そうか……。そうですよね……。私としたことが、単純で大切なことを失念してしまいました。」

母親「そりゃあ、まあ、ピーチャンだけ倒しても、だめだろうねえ。」

勇者「Σ（；。・。D・。） えっ？何でっ？何みんなサクサク判ってんのっ？どゆことっ？俺様、全然わかんない！！」

女神「『魔界の四大悪魔伯爵』ということは、今の魔界にはライーミさんの他に、あと3人の四大悪魔伯爵がいるってことですよ。」

勇者「（：。：。；。D；。；。：。） 何ですとおおおおウツツ？魔王とミイラじじいの他に、最低でもあと3人倒さなきゃならないうってこと——？ムツキヤー——聞いてねーぞ、そんな話——！！！！最終回がまた遠のいた——！！！！」

母親「聞いてないも何もあるかい。肩書きに数字が入ってる時点で、気付きなさいよ、この子は！」

魔王「当たり前なんスけど、ライーミ以外の他の三人は、若いし実力者揃いだし、普通に考えて、かなり手強いっす。おまけにそのうちの一人は……」

謎の声「——そのうちの一人は、魔王の座と、神界と人間界の制圧を狙っている。」

えっ？と一同が声のした方を振り向くと、視線の先には噴水があり、中心には小便小僧があつた！！！！

小僧のち。ここからは、チヨロチヨロと水が出ていて、池の部分には金魚が泳いでいる。

勇者「Σ（「ロ、１１１」） おおう！！小便小僧がしゃべったッ？」

女神「像がしゃべるわけじゃないですか！しゃべったとしたのなら、金魚の方です！！！」

謎の声「山（。∩山） またんかい！！我輩は、小便小僧でも金魚でもないわ！！それから、像だけじゃなくて、金魚も普通はしゃべれないから！！！」

母親「小便小僧に後ろに誰か男がいるみたいだね。そっちだろ、しゃべったのは。」

女神「ああ、なるほどなるほど。人間ならしゃべっても不思議じゃありませんね。あら、しっぽと角があるわ。あの方、悪魔さんみたい。」

母親「じゃあ、しゃべったのは人間じゃなくて、悪魔だね。」

謎の男「いやあのね！議論するなら、誰がしゃべったかじゃなくて、我輩のしゃべった内容についてにして欲しいんだけど！！！」

勇者「で、あんた、何て言ってたっけ？小便小僧と金魚に気をとら

れて、なんかスポツと忘れたわ。」

謎の男「クソツ！世話のやける連中だ！！そこまで言うのなら、もう一度だけ言ってやろう！！あ・その前に、準備するから、ちょっと待っててねっ。帰っちゃだめだからねっ。約束ねっ。」

謎の男はしつかりと念をおすと、一生懸命に小便小僧の上によじよじ登り始めた。

が、1回失敗してベチャツと噴水に転落、その勢いで金魚を飲み込んでしまい、メチャクチャむせこむ。

それでも諦めず、今度は小便小僧のてっぺんまで登りきることに成功。

着ていた黒マントがべちよべちよになってしまったことに気が付いて、一回ぎゅうううと絞ってから、ちゃんと皺を伸ばす。

謎の男「はい。準備完了いたしましたっ。……えゝ気をとりなおしまして……。ごほんごぼん。あゝあゝ。只今マイク(?)のテスト中。(小便小僧の上で、マントをバッサアアアツと翻して大威張り)ふははははははは！！改めて貴様ら愚民どもに教えてやるう！！我輩の名は、シヨールベルキン！！魔王の座と、神界と人間界の制圧を目論む、最高に悪くてカッチョイイ悪魔なのだアアアア！！！！！」

魔王「ああ、彼、魔界の四大悪魔伯爵のひとりなんっス。実力も野心もあるんですけど、どうにもアホっぽくて……。」

勇者「アホなのは見りゃ判るよ。名前何だっ？シヨール……ベ……？……ま・いっか。あいつのことは今後、判りやすく、『小便金魚』

と呼ぼう。」

小便金魚「山(。山) ヲタニートしてる魔王様にアホ呼ばわりされる覚えはないわああああ!!!それから小便金魚とは何じやああああ!!!あつ!気が付いたら、我輩の台詞の前の名前の表記が、さつさと小便金魚にされているうううう!!!こんな名前はイヤだあああ!!!やり直しを要求するうううう!!!」

何かついに現れたっぽい、真のラスボスこと、魔界の四大悪魔伯爵の一人、シヨールベルキン!!!!

だが、勇者ミナミンに、覚え辛いからっていう理由だけで、いきなり名前を『小便金魚』に省略されてしまった!!!!

他にも、まだ出てきてない悪魔伯爵が2人もいるらしいし、どうする?どうなる?世界の運命!!!!

いきなりRPGみたいな展開になってきやがったが、勇者ミナミンと、女神アルテシアと、魔王ピイチャンと、ミナミンの母ちゃんは世界を救えるのか??

続く。

23話「悲しみのフラレ3桁 怒りの最強魔法炸裂!!!」

ついに現れた、魔界の四大悪魔伯爵のひとり、シヨールベルキン!!
彼は、魔界一の実力・魔力・根性・目立とう精神（大笑）を持った男だった!!

ヤル気に乏しい連中ばかりが居並ぶこの話の中で、彼だけが魔王の座を奪い、人間界と神界を制圧しようとハリキッているらしい!!
何て空気を読まない迷惑な奴なんだ!!

どうやらこいつがラスボスカッ?

彼は金魚が泳いでいる噴水の中央に設置されている小便小僧の上にふんぞりかえって、降りようとしない。

単に高いところが大好きともいう。

馬鹿と煙は（以下略）

小便金魚「ふははははは!! 我が名はシヨールベルキン!! 小便金魚ではない!! シヨールベルキン!! 大事なことから、もう一回言うけど、我輩の名前は、シヨールベルキン!! カッコ良くて、頭も良い我輩こそが、真の魔王にふさわしい男!! アーユッオツケーエィ? オーイエー!!」

女神「まあ……ミナミンがつけた小便金魚という仇名がよっぽど悔しかったのしょうねえ。ミナミン、可哀想だから新しい仇名を考えてあげましょうよ。」

勇者「えゝめんどくさゝい。仕方ないなゝもゝ。じゃあ、小便金魚とか、魚便金小、どっちがいいと思う?」

魔王「どっちも判り辛いから、元の小便金魚のままでいいんじゃない

いつスかね？」

小便金魚「Σ(Ｔ□Ｔ) 小金便魚とか、魚便金小って何ツ？漢字の順番入れ替えただけじゃん！！もうちよつとヒネってよ！！……いやいや、そうじゃなかった、仇名はいらないから、本名で呼べというておるうに！！見てよ、我輩のつぶらな瞳を！ちよつぴり涙目になっちゃってんよ！！」

女神「まあ、傷つきやすいお年頃なのですね。」

母親「見た感じ中年に差し掛かってるんじゃないのかい？お年頃っていう齡にも見えないけどねえ。結婚はしているのかい？」

魔王「いや、バリバリ独身っス。」

母親「だらうねえ。ああでも、何か、判る気がするよ。いかにも嫁さんが来てくれなさそうな面構えをしてるし。」

魔王「キンちゃん嫁さんもらう努力はしてるんスよ。一生懸命、婚活したり、ナンパしたり、コンパ出まくったりしてるらしいっスでも、毎度毎度、『笑い声大きい』とか、『自分のことしか話をしない人はちよつと……』とか、『服装とメイクが派手すぎ。香水もキッツイし！』とか、『妄想癖あるんじゃないですか？』とか言われて、サクツと断られちゃうそーっス。確か連敗フラレ記録９９回だとか。」

女神「(；。0。0) まあ、９９回も女性に交際を断られたのですか！それはそれは。随分とご苦労なさっているのですねえ……。」

勇者「アル、お前、あいつと結婚してやればあ？」

女神「アハハハハ、やあだあ！ミナミンったらあ！冗談キツツインですから！もっすっごい、ちょっありえないですう！（大笑いしながら即答）」

小便金魚「Σ（□ 111） がびーん！！（石化）」

勇者「……………こういう時の女って、サククリと残酷だよな…。（ちよつと小便金魚に同情気味）」

魔王「あ、これでフラレ連敗記録100回に更新になったっスね。」

勇者「おめでとう、小便金魚くん！！祝・フラレ記録3桁に突入だ！！（ぱちぱちぱち）」

小便金魚「お……おのれ……！！（怒りでふるふるしながら）女神アルテシアちゃんめ、ちよつと可愛いなっとか思ってたのに、我輩のナイーブな心を、土足で踏みにじりおって！！どっかっん！！もっう、許さないもんね！！貴様ら全員、死刑！！もう決定！！」

勇者「待てい、死刑にするなら、アルだけにしろ！！俺様たちはお前の心を土足で踏みにじってなどいない！！むしろ、哀れな生き物だなっとか思っで、とつても蔑んだ目をしながら同情しているぐらいだ！！」

小便金魚「山（°Д°） 山） 余計腹たつわッ！！っつか、今、我輩の台詞の前についてる名前の表記が、ずつと小便金魚になつてるのは、勇者ミナミン、貴様のせいではないかつ！！これはイヂメです！！先生（誰？）これはイヂメでっす！！泣くぞっ！！我輩、もうマジ泣きするぞっ！！」

勇者「俺様のせいではない！！噴水でコケて金魚飲み込みそうになつて、それでも小便小僧の上に乗リ続けているお前が悪いのだ！！それからフラレ続けているのも、どう考えたって貴様の自業自得だろうが！！俺様は悪くない！！まあ、今回の件に限らず、いつでも何でもどこでも、俺様は常に悪くないけどな！！ふははははは！！！」

女神「（溜息まじりに）ミナミンって、たとえ何があっても、最後まで自分が悪いって認めないタイプですよねぇ…。」

母親「（同じく溜息混じりに）嫁の来るアテがない話も、ひとつとじゃないよ…。このままじゃ、うちのミナミンにだって、お嫁さんが来てくれるかどうか…。そうだ！どうだい、アルテシアちゃん。うちにお嫁に來ないかい？まんじゅう食べ放題だよ！」

女神「ごめんなさい、お母様。毎日まんじゅう食べ放題なのはとても魅力的ですが、初期設定で必須条件である、私の夫がミナミンっていうのが、断固ありえないですつ。（笑顔できっぱり）」

勇者「俺様だって、貧乳は御免蒙るわい！！！」

女神「（@?@…:;）むきー！！何ですってええええ???？」

魔王「アハハハハ 俺には、藤崎詩織ちゃんが心の中にいるので、リアル結婚なんか、ちっとも関係ないですけどね〜！（晴れやかに婚活戦線離脱）」

小便金魚「魔王ピイチャンめ！！よくもぬけぬけと！！貴様、持ち込まれる縁談を、次々と断つてると思ったら、藤崎詩織に操を立てておったのか！！！」

勇者「Σ（「Д」；） えっ？嘘だろ、ピイチャン、何、お前モテンのっ？そのブサダサっぷりでっ？その無能っぷりでっ？そのヲタっぷりでっ？」

魔王「いやあ、俺がモテるというよりは、俺が『魔王だから』ですよ。王家と縁戚になりたい貴族連中から、是非うちの娘を嫁に！ってカンジで、縁談申し込まれるんす。俺、藤崎詩織一筋だっつってんのに、もうすっげえ面倒くさくて」。

小便金魚「（ゴゴゴゴゴゴ……）見合い話を先方から申し込んでもらっているというのに、断るだなんて！！何て贅沢かつ破廉恥（？）な！！くくうっ！！魔王、許すまじ！！怒りリミット・心頭モードオオオオオ！！やはり貴様を倒して、この我輩が魔王の座に就いてやるうううっ！！（背後にゴバーツと炎があがる）」

女神「まあ、小便金魚さんが魔王になりたいと思った動機は、お嫁さんが欲しかったからなのですね。」

母親「というか、自分がフラれて、魔王さんには縁談があるもんだから、逆恨みしてるだけなんじゃないのかい？」

勇者「女が男に求める結婚条件に、地位や金なんかが相当必要要素であることは認めるが、今現在、『伯爵』な時点で、もうそれは十分に足りてるだろ……。というより、努力して変えるべきなのは、性格とか、笑い声とか、身なりの方だろうって気がするんだが……。」

女神「そうですねえ。モミアゲが妙に長くてカールしているところとか、フ：三分けなところとか、口ヒゲとか、ダサイマントとか、なんかもうありえないってカンジですう」。

母親「色々と治せないんだろっし、治らないような偏屈な性格だからこそ、魔王になりたいだなんて、しょーもないこと言い出したんだろう。」

女神「。+・（・）+。お母さまの一言って、毎回、至言ですよ。」

小便金魚「（@?@・:~） キーーーーー！！もうアツタマきたー！！この連中、酷すぎっ！！我輩のナイーブハートは、もうすっかりボロボロであるー！！只今から、我輩の最強呪文をお見舞いしてくれようぞー！！……アブラカタブラ……チチンパイパイ……アルティメッドキラーファイヤーボオオオ〜ルッ！！どおりやああああー！！！！（手のひらに集めた炎を、巨大な玉と化して、勢い良く発射！！！！）」

勇者「、。ヾ（ゝッ！！ ギャアアアア————！！何か、すっごいでっかい あっつい の、キタ————！！！！」

100人の女にフラレた恨みを凝縮した、紅蓮の究極魔法が勇者たちを襲いかかる！！！！

流星は魔界の最大の実力者、四大悪魔伯爵ショーベルキン！！

今までの中で、一番普通のピンチかも知れないぞー！！

勝てるのか？

いや、逃げるのか？

どうする、どうなる、勇者御一行様！！！！

続く。

24話「襲いかかる小便金魚！！紅蓮の攻防！！」

魔王ピイチャンよりももつと悪い奴、魔界の四大悪魔伯爵の一人、シヨールベルキンこと小便金魚！！

モテないことを勇者ミナミンたちにバカにされた彼は、すっかり逆ギレ。

何かすつごいごつつい超必殺火炎魔法を、小便小僧の上から放ってきやがった！！

危うし！！勇者御一行様！！

勇者「……ドッ！ッ！！ギャアアア——！！何か、すつごいでつかいあつつの、キタ——！！！」

小便金魚「くらえええい！！我が最強の火炎魔法を！！ちきしょう、ちきしょう！！我輩がモテないのは、お前らのせいなんじゃああああ！！（泣きながら）」

勇者「それは濡れ衣だろうがああああ！！だが、濡れた衣であつても、現実のこの炎は消せないのだった！！なんてネ！あ何か俺様、今、面白いこと言つたみたい！！山田くん、座布団をよこせ！（自分から要求）……などと言っている場合かああああ！！ぎゃああああ！！アチチチチ！！！」

魔王「お任せくださいっス！！！！（最前列に凛々しく立つ！）ふんぬうウウウ——！！！！（奮起）防御魔法 展開！！どぐぎゃごわああああ！！！！（鼻息炸裂させながら、気合と共にカツコ良く盾魔法を出現させる！）」

小便金魚「山(。△山) おのれ、こしゃくな!! にゅおおお
お!!! (気張る)」

魔王「負けるもんかあああ!!! ふんごおおおお!!! (いきむ)」

女神「＼(○><○)ノ 凄い、魔王さんっ!!! 炎が私たちを避けていくわ!!! 頑張つてえ!!! (背後から応援)」

勇者「Σ、(。△○)ノ うおおお! よくやった、ピイチャン!
! 素晴らしい鼻息じゃ!!! 誉めてつかわす!!! (女神の後ろに隠れつつ、応援)」

魔王「いやいやいや! 俺が使ってるの、防御魔法っスから!!! 鼻息で消してるわけじゃないっスから!!!」

勇者「炎さえ消えればどっちでもいいわい!!! ゆけい、魔王よ!!!
この鼻息の勢いで、あの小生意気な小便金魚を小便小僧の座(?)
から引き摺り下ろすのじゃ!!! (女神の後ろから指令)」

女神「(。△;) ミナミン、あなたさっきから何もしてないのに、何様なんですか...」

魔王「いや、このまま押し返して反撃すんのとが全然無理っス!!!
金ちゃんの方が魔力キャパも持久力もレベルもぶっちゃけ俺より上
なんで、やられるのは時間の問題みたいっスうう!!! ぜえぜえ!
(なんかすごい苦しそう)」

勇者「、(#。△)ノ なんだとう? この根性なしめ!!!」

女神「……ミナミン……どうしてあなたは何もしてないくせに、ひたすら偉そうなんですか。かくいう私も、治癒魔法しか使えないので、ツツコミ以外、何もできませんが……。うつつう。」

魔王「言ってる場合じゃねっすうううう！！ぐえええええ……もうダメあああゝ！げふつ。（倒）」

小便金魚「ふははははは……！魔王め、愚かな……！この小便金魚……じゃなかった！ああもう！ついに自分でも間違っちゃったじゃん！言い直しますっ……！大事なことから言い直しますっ……！このシヨールベルキンに勝とうなどとは100年早いわ！このコワッパどもめらが……！」

勇者「ぎゃああああ……！炎がくるうううう……！タッスケテええええ……！」

小便金魚「くらええええええい……！トドメじゃああああ……！」

母親「——ちよいとお待ち……！（どど……ん……！……！……！……！瀕死のクリリンを助けに来た悟空ぐらい、カツコ良く登場）」

小便金魚「Σ（；・・A・）……ぬっ？」

女神「Σ（>＜）ノきゃあああ……お母様あッ！」

母親「いくら出来が悪いとはいえ、我が子を目の前で殺されてなる

もんかい！！私に任せてどいてな、魔王さん！！（炎をものともせず、小便金魚に突撃する）ふんぬぐわああああ！！！！（大迫力）息子救済母の愛拳！超必殺奥義！！！！絶・味噌天翔味醂菩薩海老昆布椎茸出汁鳳凰覇アアアアア——！！！！」

小便金魚の嫉妬の炎と、母ちゃんの愛の炎が、激しくぶつかりあう！！！！
ばぎょごくわああん！！！！
吹き荒れる爆風！！

女神「（＞Ａ＜）ノ」 頑張つてえええ！！お母様ああ！！！！」

勇者「うをゝあの小便金魚すげー！うちの母ちゃんと互角に渡り合える生き物を生まれて初めて見たあ。」

魔王「（何とか起き上がった）いや……互角じゃねっス。むしろ分が悪いかも……」

女神「ほんとだわ！じわじわとお母様が押されているわ……！！」

魔王「小便金魚は、魔界最強クラスの魔術師っス。強くなるために、色々な筋トレ、エクササイズ、勉強、発声練習、100マス計算、漢字の書き取りを毎日していやがるんス！！いくら山のウドウとはいえ、一介の主婦のたちうちできる相手ではねえっス！！」

女神「まあ、見かけによらず、小便金魚さんったら何て真面目な方なんでしょう。でも、このままではお母様がやられてしまうわ！」

勇者「°・+・（・）°・+・°　やった、マジでっ？うわ、頑張れ、小便金魚！」

女神「＼（＃°Δ）ノ「ガッ？（ノ、Δ）ノ　ミナミン、何てこと言っんですかッ！それにお母様がやられてしまったら、次は私たちの番なんですよ！」

勇者「Σ（「Δ」；）　あ・そうか！それはいかん！」

女神「何とかしてください、ミナミン！あなた、勇者でしょ！」

勇者「フッ……よかろう！ついにカッコいい俺様の出番というわけだな！」

魔王「おおっ！勇者さんが、何かヤル気になっているっスよ！」

女神「何があったんですか、ミナミン？熱で脳みそ焦げたんですかっ？」

勇者「誰の脳みそが焦げたんだよ、失敬な！たった今、俺様はあの小便金魚を一撃で倒すことのできる秘策を思いついたのだ！」

魔王＆女神「Σ（°・；）　ええっ？秘策っ？」

実は、あの山のフドウチックな母ちゃんですら圧されるほどの実力者だった小便金魚！！

小便金魚を倒さないと、バッドエンドロールが流れてしまうぞ！！圧倒的不利な状況の中で、勇者ミナミンが考えついた秘策とはっ？

何かどーせロクでもないことのような予感がいっぱいだ！！

続く。

25話「勇者ミナミン、空を飛ぶ！」

あまりにもアホなので油断していたが、意外にも強かった小便金魚こと、魔界の四大悪魔伯爵ショーベルキン！！

小便金魚は、小便小僧のてっぺんから、強力な火炎魔法を放つてきた！！

このままでは、ゲームオーバーになってしまうぞ？

どうする、勇者ミナミン＆女神アルテシア、ついでに魔王ピイチヤン！！

女神「（。D ; ≡ ; D） ああああ！早くしないと、お母様まで小便金魚さんの魔法にやられてしまうわー！！」

勇者「焦ってはいかん！！うちの母ちゃんは、まんじゅう作りで鍛えてるから（？）まだしばらくはもつ！！というか、母ちゃんは限界ぐらいまで疲弊してもらって、人としてちょうどいいぐらいだから！（親不幸）それはさておき、よいか、よく聞け、二人とも！俺様の作戦通りにやれば、必ずあの小便金魚を倒すことが出来る！」

魔王「Σ（・□・；） マジッスかつ？判ったッス！従うッス！！」

女神「で、その作戦とはっ？」

勇者「小便金魚が発射し続けている魔法の炎を、俺様が一瞬だけ完全に止めてみせる！その隙に、お前ら二人で俺様を担ぎ、小便金魚のところに向けて放り投げるのだ！奴のもとに辿り着いた俺様は、この聖剣又カミソードで小便金魚の魔力の源である、しっぱを一撃で斬りおとす！」

女神「Σ(。°。°;) わあ、びっくり！！ミナミンの立てる作戦なんて、全然期待してなかったけど、何かマトモにイケそうだわ！」

魔王「でも、金ちゃんの魔法を一瞬だけ完全に止める方法なんてあるんスか？」

勇者「その点は任せる！！間違いない、100%成功すると断言しよう！！（親指ぐっ）」

女神「まあっ！ミナミンが主人公っぽい表情をしながら、齒をキラーンと輝かせているわ！」

魔王「Σd(。°。°) わかったっス！その輝く白い齒を信じるっスー！」

勇者「そろそろ母ちゃんも限界のようだ！！いくぞ！！皆の衆！！」

魔王&女神「、(。D)ノ おうつ！！！！！！」

母ちゃんの放つ拳圧が、小便金魚の火炎魔法と激しくぶつかりあう！！

だが、じりじりと母ちゃんが圧されているのは明らかだ！！

母ちゃんの額には、玉のような汗がふきだし、サザエさんのようにきつちりと結っている髪の毛の端がジリジリと焦げはじめてきている！！その斜め後方に陣取った魔王ピイチャンと女神アルテシアは、運動会の騎馬戦のように勇者ミナミンを担ぎ上げた！！

ミナミンは、聖剣ヌカミソードをビニール袋から抜き放ち、準備を整えると、小便金魚に向かって大声で叫んだのである！！

勇者「（あらぬ方向を指差して）あああああ！！！！美人の看護士さんが、こっち見つてるうう！！！！」（嘘）」

小便金魚「キュ　・　＋　＊　（　○　△　○　）　＊　・　＋　・　ン　　えっ？
うっそ、マジで？美人ナースどこ？美人ナース！！！！今・すぐ・
即！！是非、結婚してください、美人ナース！！（魔法を思いつき
り中断して、頬を赤らめながら、キョロキョロとよそ見）」

魔王「○　　＊　○　　おお、やったっス！！本当に金ちゃんの魔法が完全に止まったっス！流石っス！！」

勇者「見たか！！古典的ではあるが、男の深層心理をついた見事な作戦だろう！！ナースは男の永遠の憧れだ！！成功しないわけがない！！！」

女神「（　・　・　・　）　（無言で男ども全員に冷ややかな視線を注ぐ）」

勇者「さあ、今のうちだ！！騎馬2名！俺様を小便金魚のもとまで飛ばすのだ！！！」

魔王「よしきた合点っス！！ぬキョおおおおお！！！！！」

女神「ええい！！どっこいしょおおお——ッ！！！」

魔王と女神は、ミナミンを小便小僧の頂上にいる小便金魚めがけて、全力で投げ込んだ！！

の股間を押さえる)」

女神「心配するところがズレてませんか？……ところで、よく考えたらこの作戦、魔王さんが小便金魚さんの魔法を防いでくれている間に、お母様にミナミンを投げてもらうのが、一番の適材適所だったような気がするわ……。はっ。落ち着いて分析している場合じゃなかった！お母様が倒れている！私の白魔法で手当してあげないと！」

魔王「（ハ―ハ；）　かくいう女神さんも、勇者さんの心配は、全然してないじゃないっすか。」

小便金魚「くおら、ちょっと待てお前らっ！！暢気に漫談している場合ではないわ！！魔王さんと女神さんで、イチヤイチヤしゃがって！！（嫉妬）さては、みんなして我輩を騙したな！いないじゃん、美人ナース！」

魔王「Σ（「□ 111」）　ぎゃっ！バレちゃったっす！！」

小便金魚「もう、ほんつつつとアツタマきた！！お前らまとめて火炎地獄に送ってや……………うををををっ？」

小便金魚が、新たなる火炎魔法を放とうとした、その時である！！ミナミンが激しくぶつかった、小便小僧中央の男のシンボルが生えていたあたり（笑）からビシッとヒビが入り、がらがらと音を立てて像が崩れてしまった！！

小便金魚「　（　。D。　）　　ぎゃおっつっつっ！！！！たゝお

れ〜るぞおおおおう！！！！（親切に説明ネームを叫びながら倒壊）

「

がらがらがっしゃ〜ん！！

ぼっちゃ〜ん！！！！

ぴちぴちぴち。（池の金魚、またもや大騒ぎ）

……………し〜ん……………。

小便金魚のへんじがない。ただのしかばねのようだ。

さつきから勇者ミナミンのへんじもない。ついでにただのしかばねのようだ。

二人とも、頭にでっかいタンコブが出来ている。

魔王「……………ちょっと作戦とは違ったけど、まあ何とか、金ちゃんを倒すことには成功したっぽいっスね……………」

女神「これで一件落着かしら。あつ、もしかしてラスボスっぽい人を倒したから、次回こそ最終回とかつ？」

かくして、勇者ミナミンの勇氣ある犠牲（？）と引きかえに、小便金魚を戦闘不能することに成功した、魔王ピイチャンと、女神アルテシア！

有難う、ミナミン！！よくやった、ミナミン！！（ミナミンの爽やかな笑顔が、青空に浮かぶ）

ラスボスっぽい悪魔を倒したので、ついに次回、最終回の予感！！

続く。

←

←

←

←

←

←

謎の女の声「ちよいとお待ち！！冗談じゃないわよ！そう簡単に、最終回にはならなくてよッ！」

謎の男の声「（手をパンパンと叩きながら）はいはい！その通り！ピーちゃんも、アルテシアちゃんも、大切なこと忘れてませんか？」

女神「……あうっ。新キャラっ？」

魔王「Σ（「ロ、１１１」） あああああ、こいつら——！！」（心当たりが有りそう）「

やっぱり最終回にはならないっぽい!!
てか、誰っ？

今度こそ、続くっ。

26話「魔界の四大悪魔伯爵、勢ぞろい!!」

魔界の四大悪魔伯爵である小便金魚と、何だかんだで見事に相討ちとなった勇者ミナミン!

小便金魚とミナミンは二人とも仲良く失神し、公園の池にぶくぶくと沈み中である。

有難う、ミナミン!! (棒読み) よくやった、ミナミン!! (棒読み)

一件落着、悪は滅びた、イエッファー!!

ようやく世界は平和になったのだ、めでたしめでたし!!

魔王ピイちゃん、女神アルテシアが最終回の予感に喜んだのも束の間、どこからともなく響き渡る、怪しい男女の声!!

謎の女の声「ちょいとお待ち!! 冗談じゃないわよ! そう簡単に、最終回にはならなくてよッ!!」

謎の男の声「(手をパンパンと叩きながら) はいはい! その通り! ピイちゃんも、アルテシアちゃんも、大切なこと忘れてませんか?」

女神「……あうっ。新キャラっ?」

魔王「Σ(□_||_) あああああっス——!! (心当たりが有りそう)」

女神「忘れていた大事なことっていうと、まさか、四大悪魔伯爵で今まで出てきていない小便金魚さんとミイラじいさん以外の、残

り2名つてことですかっ？」

謎の女の声「その通りよーッ！！！！」

突然、公園の芝生の一部がガッバァーッとめくれあがり、年若い美女が現れた！！（ばーん！！！！）

背中が大きくあいたスリット入りのデザインの黒ドレス、ゆるやかなカーブを描いている長い黒髪の上には、見事な角が2本生えており、ぷりんぷりんのお尻からは、悪魔の魔力の源であるしつぽが生えている！！

女は赤い唇に妖艶な微笑みを浮かべ、高笑いをしながら自己紹介を始めた。

謎の美女「そう！アタシは魔界の四大伯爵の一人、名前は……げふっ……ごほごほん。ちきしょう、芝生をめくって隠れていたもんだから、口の中に砂が……げふふん。もがもがつ。」

魔王「泥だらけっスよ。なんでそんなヘンテコなところから出てくるんっスか。」

謎の美女「仕方ないじゃない、アタシ、テレポート魔術はちよつぴり苦手なんだもの！あゝまだ口の中がじゃりじゃりするわ！ぺっぺっぺっ。」

魔王「（ハ―ハ；） ハルーナちゃん、また金ちゃんのことを追っかけてきたんスか？」

ハルーナ「あああっ！！ピイチャン様てば、ひっどおおいッ！ア

タシが今、この貧乳女神に向かってカツコ良く自己紹介しようとしてたのに、先にアタシの名前言っちゃダメじゃないのよお！！」

女神「（-皿-#） ひ……貧乳ですってええええ！！何よっ！
！ちょっとタ張メロンみたいな乳しているからって、偉そうにっ！
」

ハルーナ「ふんっ！そっちこそ清纯派気取って、髪の毛ずるずる伸ばして、フェミニン白ドレスなんか着ちゃってさ！！やなカンジ！
！この貧乳貧乳貧乳貧乳貧乳貧乳貧乳貧乳貧乳、もひとつおまけにド貧乳！！！！」

女神「（@?@……） き——！！！！そっちこそ、そんなホルスタインみたいな乳じゃ、齡とってから垂れちゃうんですからっ！
」

ハルーナ「ほほほほ！！アタシの乳は絶対に垂れないのよ！！なんたって最高級のシリ……………おっといけない、げふげふん。」

女神「え？今何て？シリ……？」

ハルーナ「（L、口、;）L うるっさいわねッ、洩垂れ小娘！！とにかくっ！！アタシは愛しのショールベルキン様を助けなきゃいけないのよっ！傷ついたショールベルキン様を助けて、ここで点数がっぱり稼ぐ！そしていつかは、お嫁さんにしてもらのっ！（夢見る乙女の表情）」

魔王「ハルーナちゃん……。金ちゃんがピンチになるまで、遠隔監視魔法で様子みながら待機してたんスね……。」

その時である!!!

噴水の水がいきなり、ドザーッと水柱をあげ、中に沈んでいたはずの勇者ミナミンと小便金魚が、完全復活した!!!

勇者「、(。D)ノ にゅおおおお——!!!何か、夕張メロン乳とか、ホルスタイン乳とかいう、素敵キーワードの入った俺様好みの会話が、聞こえてきたアアア——!!!寝ている場合ではない!!!巨乳うううハンターアアア、今・復活ううう!!!」

小便金魚「えっえっ?巨乳?巨乳美女、どこどこ? (キヨロキヨロ)」

ハルーナ「。...*(嬉、D、嬉)。...* あゝん、シヨールキン様あゝご無事だったのですねっ!!!あなたのハルーナがお助けに参りましたわあゝ!!!」

勇者「(。。。)...*。。。..おおおお!!!まさにお色気ムンムン不二子ちゃんチックな巨乳美女じゃないですかああ!!!こういう新キャラ、待ってましたああああ!!!」

小便金魚「Σ(□_||_) ギャアアア!!!は.....ハルーナちゃんではないかあああああ!!!!!!何でここにいるんだあああ!!!!!!」

ハルーナ「んもう、シヨールキン様ったら!照れちゃってん!!!ツンデレなんだから、くすっ」

小便金魚「アワ（。。。）。（）ワワ！！　ぎよわあああ
あ！！近寄るなあああ！！！！怨霊退散んんん！！！！」

女神「（魔王に向かってこっさり聞く）あら…？小便金魚さんって、超絶お嫁さん募集中なんですよね？あのメロン乳のホルスタイン女って、小便金魚さんのこと大好きみたいですけど？どうして小便金魚さんは彼女のことを嫌がってるんですか？」

魔王「（やつぱりこそそ女神だけ聞こえるように答える）いやまあ……ちよつとばかし事情があるんスよ…。」

謎の男「（やつぱりこそそと魔王と女神にだけ聞こえるように教えてあげる）アルテシアちゃん、よく考えてみて。シリコンと、金ちゃんが嫌がってるって段階で、何か気付かないかい？」

女神「シリコンっていうと、もしかしてあれは偽乳ってことですか？美人の女性なら誰でも結婚したい小便金魚さんが、結婚したくない相手ってことは…。あつ、もしかして彼女…いえ、もしかして彼女じゃなくて『彼』っ？」

謎の男「はい、アルテシアちゃん、ご名答」（ぱちぱちぱち）

女神「Σ（。）。（）　って！！！！いつの間にこっちの輪に混ざってるんですか、貴方、誰ええええ！？」

謎の男「いつの間にも何も。ボクは普通に公園の入り口から入ってきたけど？その自動販売機でコーラ買ってたら、出遅れちゃった。ああ自己紹介するね。ボクの名前はエガオン。魔界の大悪魔伯爵だよ。よろしくね。」

女神「あらまあ、ご丁寧に。私の名前は女神アルテシアと申します。エガオンさん、普通にＴシャツとジーンズ姿だし、とても優しそうな顔をしていらっしやいましたので、悪魔さんだとは思いませんでしたわ。」

エガオン「ええ、良く言われますよ。ボク、巷じゃあ笑顔で……」

突然、魔王ピイチャンがアルテシアの腕を強く引く！
勢い余ってしりもちをついてしまうアルテシア。

女神「アイタタタ。ちょっ！魔王さん、何をなさるんですかつ！」

魔王「……女神さんを助けたんっスよ。見てください、さっきまで貴女が立っていた場所を！」

アルテシアは驚いて目を見開いた。
先ほどまで彼女が立っていた位置に、黒々とした巨大な氷の刃が、地面から突き出ていたのだ！！

女神「えっ？こ……これは……っ？」

魔王「彼は通称『笑顔討ちのエガオン』。毒気のない普通の格好とハンサムな笑顔で、他人を油断させておいて、突然攻撃をするという、とっても悪魔っぽい特技を持っているんっス！！」

エガオン「おやまあ、ピイチャン様。いいんですか、魔界の王が女神様なんかかばって。アルテシアちゃんもダメでしょ。簡単に人は信用しないこと。」

女神「い、い、（Ｔ　Ｔ）い、い、敵に色々のご忠言をいただいでしまいました。」

エガオン「さあて、今のは挨拶代わりだよ。次からは手加減しないから、二人とも真面目に戦ってね。」

魔王「（：：；。；∩；。；：：）
げ……！無理っス、俺よりエ
ガちゃんの方が強いっス！（油汗）」

女神「(ΩДΩ) はうううう！私だって戦いは苦手ですう！」

新キャラの正体は、魔界の四大悪魔伯爵残り2名！！

ハルーナ（男）と、エガオン（悪）！！

唯一の戦闘力だったミナミンの母ちゃんが戦闘不能な今、貧乳女神と貧弱魔王に勝ち目はあるのか？

野郎のシリコン乳に惑わされている場合ではないぞ、勇者ミナミン

絶対絶命のピンチは、いつでも楽しく継続中！！

続く。

27話「実はゴンタ君……」

遂に登場した、魔界の四大悪魔伯爵残り二人、セクシー美人だけどちよっぴり男の娘（笑）なハルーナちゃんと、人畜無害そうな闇討ち専門美青年エガオン君！！

それにどうやらまだ生きてたっぽい小便金魚！

3人の強力な悪魔が、勇者ミナミン・女神アルテシア・魔王ピイチヤンの前に立ちはだかったのであった！！

勇者チームの最強キャラであったはずの母ちゃんは、小便金魚との戦いで倒れたままだ！！

援軍は望めないぞ！！

どうするんだ、勇者御一行様！！

小便金魚「クククク。この我輩の友達であるエガオンが揃った今、勇者&女神よ、貴様らの命は風前の灯だ！！そして、魔王ピイチヤン！！貴様を今ここで葬ってくれるわ！！これで魔界は我輩のもの！そして縁談は先方からざつくざくとやってくるのだ！！この世の春、到来予定！！ふははははは！！」

ハルーナ「ああん、ショーベルキン様あ。友達のところへエガちゃんだけじゃなくって、ハルーナのこと仲間に入れてえ。アタシ、ショーベルキン様のためだったら、何だってやっちゃう」それから、どんなにいっぱい縁談が来ても、貴方のお嫁さんは、ア・タ・シ・だ・けっ。」

小便金魚「ぎゃああああ！！寄り添うなあああ！！！！男の子はあつちいてなさい！！っていうか、あつちいて！！お願いだから！！（半泣き状態）」

勇者「（。D。）（愕然）なにイイイイ！！！男
……だ……と……？ハルーナちゃんが男だと？どーりでちよつと声
がハスキーだと思ったぜ！！せつかく俺様、金魚の池から美女目当
てで頑張つて復活したつてのに！！もうやだ！！もう一回沈むこと
にする！！」

女神「（＞A＜） ミナミンってば！！今、この話始まって以来の、
一番の正念場真っ只中じゃないですかああ！！」

魔王「ガ（。D。）ン！！！！いつの間に三人、手を組
んでたんっスか！」

エガオン「だって金ちゃんについていたら、色々と面白そうじゃ
ない。最近、魔界が平和すぎて、退屈してたんだよね。ボク」。

勇者「俺様プロファイリングでは、このパタリロは自分さえ楽しけ
れば他人の迷惑顧みず何でもやらかす、いかにも愉快犯なタイプと
みた！何て悪い奴なんだ！！」

女神「自分が楽しくなければ、行動しないのはミナミンも一緒だと思
いますが……。それから、一人だけ噴水の中に潜つて、難を逃れよ
うとコソコソするのはやめてください。貴方、それでも主人公で
すかつ！金魚さんたちが貴方を不信な目で見ていますよ！！」

勇者「いやあ〜ん！！めんどくさあいいいい！！悪魔、ちょー怖い
し〜！」

女神「（。皿。＃） この話の中で誰よりも一番タチが悪く、ぐう
たらなのは、ミナミン……貴方ですっ！！」

勇者「（ε´） チツ。せっかく母ちゃんが戦闘不能でへばっているのに、母ちゃんみたいな説教をする奴がいる…。（ぶつぶつ）」

魔王「女神さん、勇者さん……！漫才している場合じゃねっスよ！周りを見て下さいッ！」

魔王に言われて、ミナミンとアルテシアが周囲を見渡してみると、いつの間にか集まってきたのやら、人垣が幾重にも噴水の周りを取り囲んでいた。

全員が不審そうにこちらを見ているではないか…！

勇者「ぎゃおう！！いきなり俺様たち、有名人にッ？」

魔王「病院の敷地内でこれだけ大騒ぎをしたのだから、人が集まってくるのは当たり前っスよ！」

エガオン「んゝボクたちは、ギャラリーがいても全然構わないけどゝ。ネ、金ちゃん、ゴンタ君！」

ハルーナ改めゴンタ君「Σ（□ ｌ ｌ ｌ） ちょっとっ！エガちゃん！！アタシの名前を本名の方で呼ばないでっ、何度も言うてるじゃない！！ああああっ！！アタシの台詞の前のハルーナっていう可愛い名前が、改められてゴンタ君に変えられているううううう！！！！むっきー！！」

小便金魚「フツ。我輩たちは悪い悪魔だからな！巻き添えとかは、いっばいいいた方が、より悪い奴っばいな！！（傍迷惑な自己陶醉）」

女神「（´・ω・´） はうふうふう。最強の3人の悪魔が一齐に攻撃をしかけてきたら、今の私たちでは防ぎようがありません！このままではこの人たちまで巻き添えになってしまうわ……！！ど……どうしましょうっ？」

睨み合う両陣営！

だが、実力差は歴然！！

状況は圧倒的に不利！！

戦う前から勝敗は決しているも同然である！

絶体絶命、どうすればいいんだ、魔王ピイチャン&女神アルテシア！

……ちなみに勇者ミナミンだが、相変わらず噴水の池の中に、金魚と一緒に潜りっぱなしである。

そのへんに生えていた枯れ草の茎を引っ抜いて、1本だけ水面に突き出し、見事に水の中でも呼吸を維持しているぞ！！

まるで忍術！！ある意味高度！！でも役立たず！！（笑）

その時、救いの音が、女神と魔王の耳に届いてきた……！

……ぴゅぽゅぽゅぽゅぽゅぽゅ……

女神「Σ（・□・；） はうっ！この音は警察ッ？」

続く。

28話「ネットで検索したら警察が来ました。」

公園でゴニョゴニョ暴れてたもんだから、ついに警察を呼ばれてしまった勇者御一行様&小便金魚たち悪魔三人！！

見物客が幾重にも取り囲む中で、小便金魚やハルーナ（本名：ゴンタ君）、笑顔ンたち魔界の四大悪魔伯爵に、強力魔法なんぞで暴れられたら、周囲に尋常じゃない被害が及んでしまう！！

正義の味方的には、絶対避けなくてはならない場面だぞ！！

魔王ピイチャン&女神アルテシアは、このピンチをどう切り抜けるつもりなのか！？

池に潜ったままの勇者ミナミンは、一体いつ出てくるつもりなのか！？

………ぴぽぴぽぴぽ………

女神「Σ（・□・；） はうつ！この音は警察ッ？」

魔王「ホッ。（＊・Д、） これで助かったっスね！」

女神「小便金魚さん、色々破壊してますもんね！普通誰かが通報しますよねっ。これで悪い悪魔の皆さんは逮捕されるに違いないわ！」

勇者「（水とんの術を解き、池の中からちよっぴり顔を出す。）助かった……のか？何か、騒ぎの根源として、俺様たちまで一緒に逮捕じゃないだろうな。昨日に引き続き、また留置場に逆戻りなんじゃないのか……。オマケに魔王ときたら、壁に『夜露死苦メカドック』って落書きしてたし……。間違いなく落書き現行犯逮捕確実じゃ

ねーか!」

魔王「(ΩДΩ) ええええ!!落書きじゃねっス!!あれはアー
トっス!!」

勇者「あゝアーティスト気取りなわけ。売れないアホほど、ア
ートって言葉を振りかざして自己弁護するんだよね。まゝ、言
いたいことがあるなら署で聞いてくれるから。ちゅーか、よく考
えたら、魔王ピイちゃん、お前、敵側じゃん!!何でこっち陣営に
んのっ?」

魔王「(・。・) えっ?いや……あの……(しどろもどろ)」

女神「失礼でしょ、ミナミン!魔王さんはさきほど、小便金魚さん
の攻撃を防いでくれたり、エガオンさんに攻撃された私のことを助
けてくださったのですよ!」

魔王「後で全部説明するっス!とりあえず、今、この状況をどうに
かする方が先っスよ!」

女神「そうですねっ!魔王さんの言う通りです!」

勇者「……チツ。貧乳アルめ……。すっかり俺様より魔王のこと、信
頼しやがって……!」

女神「山(。Д山) 今の話の流れに、私の乳のサイズは関係な
いでしょおっ!」

一方、小便金魚陣営では……。

ゴンタ君「どおしますう？ ショーベルキン様あ。何か警察来るみたいですけど…？」

エガオン「警察は面倒だな。でも、まだ音が遠いから、警察が到着するにはちよつと時間がありそう。来る前にこの場のギャリ―全員ブツ飛ばしちゃって、カタつけちゃおうよ。（と、言いつつ、そばにあつた自動販売機で、暢気にコーラを買う）」

小便金魚「フツ。周囲に被害が及ぶことを躊躇う我らではない！！我輩たちは何たって、勤勉で真面目な、悪い悪魔だからな！！悪いことはいっぱいしておくに限るのだ！ふはははは！！……って、ちよつと。エガちゃん、自分の分だけコーラ買わないでくれる？」

エガオン「はい、決定！じゃ、この場の見物客含め、全員をまゝごと地獄へ送り込んでから、警察が来る前に離脱するっていうことで、誰かよろしく！（傍観体勢）それから奢らないよ、金ちゃん。自分の分は自分で買いなさい。（コーラのプルトップを開けながら）」

ゴンタ君「はいはい！ ショーベルキン様あ！ アタシ！！アタシがやりまゝっす！！では、ハル―ナの超 強力呪文、イツちゃうわよん！！……アゝブラカタブラ……チチンパイパイ……」

女神「（。D ; ≡ ; D ） はうううっ！！マズいわっ！ゴンタさんが、強力呪文の詠唱を始めていますうう！！」

魔王「。。。。（iDi）。。。。 早く来てくださいっ

ス、おまわりさぁん〜!!」

勇者「、(#。D)ノ 魔王と女神がこぞって警察に頼るなよ!!」

女神「・。・。(P D、q)・。・ そういうミナミンだって、勇者のくせして池から出てこないくせに〜!!」

勇者「つかね!!今の小便金魚の台詞の中にある、『勤勉で真面目な、悪い悪魔』っていう表現はいかなものか!!それから、悪魔どもの唱える強力呪文の詠唱、どれもこれもア〜ブラカタブラチンプイプイばつかじゃねっ?手抜きだ!!」

ゴンタ君「……(、 #) 勝ちん…… テクマクマヤコンテクマクマヤコン……ザーザードザーザードスクローノーローノスーク……」

勇者「(、 D、) コノヤロウ、あのオカマめ!!俺様のツツコミに對抗して、呪文の詠唱にバリエーションを出しやがったぞ!!」

魔王「ゴンタ君、昔から負けず嫌いっスから……」

女神「(ハ―ハ;) いきなり追加できたってことは、実は言わなくても呪文自体に全く影響のない文言なんじゃないかって気がしますが……」

勇者「Σ(;;・、 D・、) おつ、アル!今、いいこと言った!これを利用すれば、警察が来るまで時間稼げるじゃん!!(大声で)やいコラ、オカマ野郎!!ちよつとアツコちゃんとベノンの呪文覚えてただけでイイ気になってんじゃね〜ぞ〜!!ま・さ・か、

アホの貴様にハーローイーンは言えないだろおおおなあああ。」

ゴンタ君「言えるわよッ！！アタシが何年ジャンプ買ってたと思うのっ！！カイザード・アルザード・キ・スク・ハンセ・グロスシルク……灰燼と化せ冥界の賢者、七つの鍵を持て、開け地獄の門……七鍵守護神！！ほほほほ！！どうっ！！」

勇者「Σ（「ロ、リー」）うわ、ちきしょう、丸暗記してやがるよ、このヲタクめ！！（魔王の方振り向いてコソコソと）このままでは負けてしまうではないか！！ちよつと！！ピイちゃん、お前もヲタクだろう！！他に何か長い呪文唱えてる漫画とかなかったかっ？」

魔王「スレイヤーズいつとくといいつスよ！」

勇者「よっしゃ、魔王、ナイス夜露死苦ヲタアシスト！！（ゴンタ君を振り向いて）すいませ〜ん！！ドラク・スレイフ竜破斬追加でお願いしま〜す！！」

ゴンタ君「げっ！スレイヤーズは見てないわよ、アタシ！！ちよつとタンマ！！今、調べるから！！（巨乳の谷間から、iphoneを取り出して、ネット検索開始）」

勇者「あっ！！汚ねえ！！悪魔の分際で、文明の利器代表あいばん使いやがった、コイツ！！！！」

魔王「あいばん、いいな〜。俺、普通のケータイっス、あいばん欲しいっス〜。」

勇者「俺だって欲しいよ！買い換える金ないんだし！！」

ひとりついていけない女神「、、（Ｔ　Ｔ）、、　警察が来るまでゴンタさんの気を逸らして、魔法の発動を食い止めるという目的は達しているんだけど、その目的を勇者さんも魔王さんも一緒に忘れてるっぽい。」

ダレ気味な戦闘を続けていたチーム勇者とチーム悪魔だったのだが、その戦いに終止符を打ったのは、次々と公園になだれこんできた、パトカーの大群だった！！

噴水を付近で対峙する勇者や悪魔伯爵たちを逃げ場なく取り囲み、武装した警官が続々と車から降りてくる！！

エガオン「あらゝ。ごちゃごちゃやってたら警察が到着しちゃいましたねゝ。めんどくさいなゝ。（コーラごくごく）」

勇者「、（　、　）／ふはははは！！見たか、俺様達の作戦を！！完璧な頭脳勝ちだな！！」

ゴンタ君「Σ（　□　１１１）　しまったわ！！そういうことだったのね！！すっかりしてやられちゃった！！」

小便金魚「おのれ、勇者め！！なかなかやりおるな！！」

女神「Σ（　□　１１１）　言うにことかいて、完璧頭脳勝ち？しかも『してやられた』とか言われて悪魔伯爵さんたちにも納得してもらえてるし！！ええええええ？？？」

勇者ミナミンたちは、警察に助けてもらえるのかっ？
ついでに、魔王ピイチャンは落書き現行犯で捕まってしまうのかっ？

続く。

29話「救世主登場！！有難うワンレン美女刑事！！」

ハルーナちゃんことゴンタ君（本名）に余計な呪文を唱えさせて時間を稼ぐという、勇者ミナミンの行き当たりばったり感アリアリな作戦は見事に功を奏した！

ゴンタ君の強力呪文が発動する前に、人間界の警察が到着し、魔界の四大悪魔伯爵と、勇者ミナミン・魔王ピーチャン・女神アルテシアを取り囲む！！

果たして、これで助かった……のかッ？

小便金魚「警察がナンボのもんじやい！！ギャラリーも警察も勇者軍団も、まとめてブツ飛ばせば我輩的には何の問題もないのだ！！ふはははは！！」

ゴンタ君「そうよ！！あたしたち三人が力を合わせれば、圧勝なんだからねッ！！ノープロブレム！！」

エガオン「えゝ三人ゝ？それボクも、もしかして数に入ってるのゝ？めんどくさいなゝ。あらゝコーラなくなっちゃったゝ。」

小便金魚「こら、エガちゃん！！コーラの缶をポイ捨てるんじゃないありません！！ゴミ箱に入れなさい！！あ・それからちゃんと缶のところに分別して捨てるんですよ！！ビンのところに入れちゃダメですよ！！（お母さん口調）」

女神「（：：：。；；；。；；） はうううう！！どうしましううつ。この人たち三人の合体技が来たら、きつと警察が束になっても

敵わないですー!!」

あの山のフドウのようなミナミンの母ちゃんすら倒すような連中である!!

警察だけでは対応しきれない!!

このままでは、人数が増えた分だけ、被害を受ける対象も増えただけになってしまう!!

——だが、その時……

奇跡が……

奇跡が起こったのである……!!!!!!

女刑事・薫「(凛々しく銃を構えて)全員、手をあげなさいッ!!」

小便金魚「ガ(。D;)ン!!!!お……お……お……

おおおおおお!!!!(雄叫び)」

勇者「美人女デカ、キタ。・*:.。(。°)。・*:. .

:!!」

そう……

パトカーから降りてきたのは若くて美人の女刑事だったッ!!

警官隊を束ねていたのは、どうやら彼女のようなッ!!

デキる女が着てます的ブランドビジネススーツに身を包み、髪型は

もちろん黒髪ワンレンストレート!!
いかにもテレビドラマにでも出てきそうな女刑事の典型的スタイル
ッ!!

女刑事・薫「手をあげなさいっ!さもなくば撃つわよッ!」

小便金魚「*:.:. .:.+. .(c*.°.°)c.°.+. .
:* ハイッ!!おおせのままにッ!手なんかもう、いくらでも
上げちゃいますからッ!!ばんざーいッッッ!!」

勇者「\ (o> <o) / つかもう、撃って!!俺様のハートを
ズギューンと撃ち抜いてッ!! (同じく万歳)」

女神とハルーナちゃん「.....。 (すごく冷たい目で、小
便金魚とミナミンを見ている)」

笑顔ン「w (;) w ンも。金ちゃんつてば、ほんと、
コスプレに弱いんだからあゝ。(コーラの空き缶を持て余しつつ)」

魔王「んゝ。俺は三次元の女には、あまり興味ないっス。」

女刑事・薫「でっ?あなたたち、どうしてこんな騒ぎになったのッ
?」

小便金魚「ハイッ!!それは、我輩が悪いのでありますッ!!先に
呪文をぶっ放したのは我輩でありますッ!!是非、逮捕して欲しい
でありますッ!! (自首)」

勇者「抜けがけとは汚ねえぞ、小便金魚め!!女刑事さまッ!俺様

も逮捕してしてくださいッ！！俺様の瞳をタイホしてくださいッ！！」

女神「すいませ〜ん！小便金魚さんの言うことは本当です！！彼が襲ってこなければ、私たちがこんな騒ぎを起こすことはありませんでした！むしろ、魔王さんや、そこに倒れているミナミンのお母さんは、小便金魚さんの火炎魔法を防いで、病院に延焼するのを防いでいたと思います！周囲に目撃者がいます！ここにいるみんなに確かめてくださって結構です、女刑事さん！！」

勇者「？（＃、皿、ノ）ノ てめえ、アル！！余計なことを！！あ、そうだ、ほら、女刑事さんッ！俺様、又カミソードという大型刃物を所持していますよッ！バリバリ銃刀法違反ですッ！！だから逮捕して、俺様の何もかもを取り調べてくださいませッ！」

女神「（＞Ａ＜）ノ ミナミンったら、せっかく私がかばってあげているのに！！それから、又カミソードじゃなくて、エクスカリバーだって言ってるでしょッ！！」

女刑事・薫「……刃物？別に見当たらないけど？どこにそんなものが？」

勇者「（；。）。） えっ？あれっ？ない！さっきまで持ってたはずなのに、又カミソードがないっ！！」

女神「（。㇏。；≡；。㇏。） ええええええ？？？？また聖剣を失くしたのですかーッ？」

魔王「あ、心配することないッス。さっき噴水にぶつかって、小便小僧と一緒に沈没した時に、剣も一緒に像の下敷きになっただけな

んじゃないかと思うっス。」

女神「（＊、＼、） ほつ。なんだ、良かった。あとで発掘しなくては。」

女刑事・薫「では、悪いのはその、派手なカツコした悪魔一人だけね！！あなたを逮捕しますッ！！」

小便金魚「＊：。 . : + . (〇 * . .) 〇 . + . . .
：＊ やった——！！」

勇者「. . . (P 〇 , q .) . . . チキショウ——！！！！」

女神「、、、 (T T) 、 、 何か間違ってる………反応が……いいえ、この二人の生き様からして、もう何もかもが間違っているわッ！！」

ゴンタ君「ちよつと待って！！ショーベルキン様が悪いのなら、アタシだって悪いわよ、刑事さん！夫の罪はお嫁さんである、アタシの罪ですっ！アタシも悪い奴なの！！だからアタシのことも逮捕してっ！！」

小便金魚「、 (# . 〇 ,) ノ ゴンタくん、我輩のお嫁さんじゃないじゃんッ！！ていうか、我輩、男の子だから、男の人と結婚できませんからっ！男の人はお嫁さんにはなれませんからっ！！」

ゴンタ君「あ・そうでしたっ！！テヘツ。メンゴメンゴ！まだ入籍してないから、未来のお嫁さんの間違いねっ。ま、アタシは彼の、ファイ・ア・ン・セつてとこかしらっ。(ウイंक&髪のをフアサツとかき上げる↓女刑事に向かって、ライバル心剥き出し)」

小便金魚「（Ｔ皿Ｔ）それも、ち・がー！ー！ー！うツツツ！ー！」

「それも、ち・が――うツツツ!!」

エガオン「えゝみんな行くの？じゃあ、ボクも逮捕してもらつちや
おつかな？」

女刑事・薫「めんどくさい連中ねッ！（警官隊に向かって）悪魔どもを全員確保しろッ！！」

指示を受けた警官たちは、すっかり戦意を喪失（？）している小便金魚、ゴンタ君、エガオンに手錠をかけると、パトカーに乗せて去っていったのであった……。

女刑事・薫「市民の皆様のご協力に感謝します。それではっ！（敬礼して退散）」

女神「（敬礼）有難うございます！助かりました！これで無事、一件落着ですね。ああ、良かった！」

勇者「（ノ丁皿丁）ノ……………（号泣）」

かくて、いともあっさり女刑事・薫にとっつかまってしまった、魔界の四大悪魔伯爵3名……。

これで世界は平和になったのであろうか？

何か釈然としないまま、次回、新展開の予感！！

続く。

30話「まさかの復活！！脱又カミソード！！」

女刑事・薫の活躍により（というか、彼女の美貌に惑わされたシヨ―ベルキンと勇者ミナミンのアホさ加減により）あっさり確保されてしまった、魔界の四大悪魔伯爵三人。
果たして世界は平和になった……のか？

母親「うつ……うつ……うつは……？」

女神「あ、気付きましたか、お母様！」

母親「私は……確かあの派手でイカれた、嫁が来そうにもない悪魔の魔法を防いでいて……。 （ガバツと起き上がり）あの独身バカ悪魔、どうしたんだいッ？ミナミンはっ？ミナミンは無事なのっ？…
…アイタタタタ。」

女神「無理しないでください！私が白魔法で応急治療しましたが、けっこう重症だと思います。きちんとその病院で、お医者様に看てもらった方がいいですよ。それから安心して、お母様。悪い悪魔たちは警察が逮捕していきました。ミナミンも無事です。」

母親「そうかい、どうにか場は治まったみたいだね。あんたが治療してくれたんだね、アルテシアちゃん。ありがとよ。……ん？ミナミンと魔王さんは、噴水でジャバジャバと何をしているんだい？」

女神「ああ……戦いの中で、諸事情により聖剣エクスカリバーを池ポチャしまして……。探している最中なのです。」

一方。

沈んでいるはずの聖剣エクスカリバーを探すべく、池の底をザブザブとさらう、勇者ミナミンと魔王ピイチャン。

池の中の金魚、大迷惑。

魔王「ああもう！小便小僧が粉々に砕けて、探し辛いつたらねえっス！勇者さ〜ん。そっちあつたっスか〜？」

勇者「（し、口、；）し　ねえよ！！どこに沈んだんだ！！」

魔王「、、（ト　ト）、、　瓦礫が邪魔で見つかりやしねえっス〜！！」

勇者「つか、もう剣いらなくなね？悪魔どももいなくなっただし、平和がコンコンチキ（？）じゃねえかよ！このままこの池に、又カミソード封印でよくね？……そうだ！！『伝説の戦い（笑）で果てた聖剣又カミソード、ここに眠る！』とか書いて看板作って立てとこう！！ご近所の名所になること間違いなし！！んでもって、ここに屋台作って、『勇者まんじゅう』を売る！！うを〜俺様、アツタマいい〜！！（何か素晴らしいことを思いついた的表情）」

女神「、（#。D）ノ　「ガッ？（ノ、D）ノ　いいわけないでしょうッ！！！！キリキリと探さないッ！！それから、又カミソードじゃなくて、エ・ク・ス・カ・リ・バーですつつつ！！！！」

母親「何だい。この池の底にエクスカリバーが沈んでいるのかい？

私が出してやるよ。ミナミン、魔王さん。まずはこの金魚ちゃんたちを別に入れ物に避難させておくれ。」

ミナミンとピーチちゃんは、病院からバケツを2個を借りてきて、1個目のバケツを使ってせっせと金魚たちをすくい集め、もう一つのバケツにまとめて入れておく。

母親「よし、準備完了みたいだね。ちよつと全員どいておいで。そうそう。もつと離れて。そのぐらいでいいかね。……よし、いくよ。すうすうすうすう（大きく息を吸って）ふんぬうウウウウウウウウウウ！！！！！！」

ミナミンの母ちゃんは、爆裂鼻息で池の水も瓦礫も全て吹き飛ばした！！！！

激しい水柱が立ち、続いて天空高く瓦礫が舞い上がる！！
空っぽになった池の中央に、深々と地面に突き刺さっている聖剣エクスカリバーが現れた！

かあちゃん
は柄に手をかけ、
剣を引き抜き、
天に掲げる。

エクスカリバーの刃が、いつの間にか西に傾いた太陽の光を浴びて、ばら色の光を放った！

ピツ
カア
アア
アア
アア
ゝ。

・
。○
。

・
★
:
:
・○
・
・○

:
:
:
★
・

魔王「（*、D、*）　おおおお〜。シャイン〜ング！ぱちぱちぱち。（拍手）」

女神「……☆……（// //）……☆……お母様、素敵〜！何だ

かアーサー王物語の、ひと場面みたい！」

勇者「アーサー王というよりは、俺様には『我が生涯に一片の悔いなし』ポーズに見えるが。それから、アーサー王は、そんな鼻息凄くねえですから！セイバーちゃんに謝れ！」

母親「私が持つていても仕方ないんだよ。この剣は勇者直系の血筋を引いた者が使わないと、効果を発揮できないように作られた魔法剣なんだ。ほれ、ミナミン。あんたがしっかり持つていなさい。（ミナミンに剣を渡す）」

勇者「えゝ何それ、そのメンドクサイ設定ゝ。いらねゝこの剣、重いし、又カミソ臭いしいゝ。……ん？た……大変だぞ、アル！！」

女神「（。；） えっ？どうしたんですか？まさか、刃こぼれでも……？（聖剣に近づく）……あああああっ！！又カミソ臭がっ！又カミソ臭がしないっ！！」

勇者「しばらく水に浸かっていたからな。浸けおき洗いと同じ効果がもたらされたのだ！！」

女神「。。。ノ、。。。良かったっ！これでもう、透明なビニール袋に入れて持ち歩かなくても良くなったのですね！」

魔王「いやあ、良かった！めでたしめでたしっスね！！」

勇者「そうとも！あとは……………（魔王ピイチャンのしっぽをガツと掴む）コイツで貴様のしっぽを斬りおとせば、一件落着じゃねえか！！！！（悪鬼の形相）」

[illegible]

母ちゃんの活躍で、無事に、しかも又カミソ臭まで落ちて、見事復活を果たした聖剣エクスカリバー！！

しかし、勇者ミナミンはこれを使って、明らかに今までミナミンよりも遥かに役にたっている魔王ピイチャンの、魔力の源であるしっぽを斬りおとすつもりらしい！

酷いぞ、ミナミン！！あんまりだミナミン！！

真の悪はむしろお前の方だ、ミナミン！！

魔王ピイチヤンの運命はどうなるっ？

続く。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3456y/>

ふぁいなるクエスト！

2012年1月3日14時48分発行